

日本橋川周辺のにぎわい創出に向けた基本方針 (取組方針Ver.1)

令和7年7月

東京都都市整備局



目次

1	はじめに	(3)
2	日本橋川周辺の現状と課題	(7)
3	日本橋川周辺のまちづくりの将来像	(23)
4	日本橋川における水辺空間の再生方針	(26)
5	ゾーン別の主な取組	(51)
6	ロードマップ（今後の進め方）	(59)
	参考資料	(61)
	・日本橋川周辺の歴史		
	・日本橋川周辺の地域特性		

1 はじめに



日本橋川とその周辺地域の変遷

- ❖ 江戸時代 日本橋川が水路網として開削されて以来、川が中心の「水の都」として繁栄
舟や人々が歩き行き交う交通の要所、まちの表舞台として、様々な地域から訪れる人々が交流することで、最先端で新しい商業・文化が創出
- ❖ 明治以降 モータリゼーションの進展等により、川を中心としたにぎわいが徐々に喪失
加えて、河川の水質悪化などもあり、時代を経るごとに川に背を向けた建築物が立ち並び、首都高速道路（以下、（首都高）という。）や鉄道が建設されるなど、景観が大きく変化
- ❖ 現 在 日本橋川周辺は、江戸から明治・戦後復興までを象徴する歴史資源や文化が色濃く残り、皇居など都心の貴重な自然資源も点在
- ❖ 将 来 首都高速道路の一部が地下化される 2040年頃には、沿川の開発と相まって新たな都市空間を創出



江戸時代の日本橋



川に背を向けた建物



水質悪化の現状（白濁化）

- ❖ 首都高地下化工事が本格化し、大規模開発の竣工を間近に控えるなど、日本橋川沿川の景色がいよいよ変わり始める。
- ❖ 日本橋川沿川が江戸時代からの歴史資源や文化をきっかけに国内外から注目され、日本橋川周辺を含め新たな産業も生まれる、東京でも唯一無二の魅力的なまち・空間にしていくことが必要

対象範囲

◆ 日本橋川を中心として周辺の駅や沿川の開発事業等の区域を含む、以下の範囲を対象範囲とする。

【範囲設定の考え方】

- 神田川から分流し隅田川に合流するまでの全長4.8kmとする。
- 日本橋川沿川200m程度を基本的な範囲とする。
- 日本橋川沿川の開発事業等が行われる場合は、その区域を含める。
- 日本橋川からの最寄駅を含める。
- 可能な限り広幅員道路で囲まれるようにする。

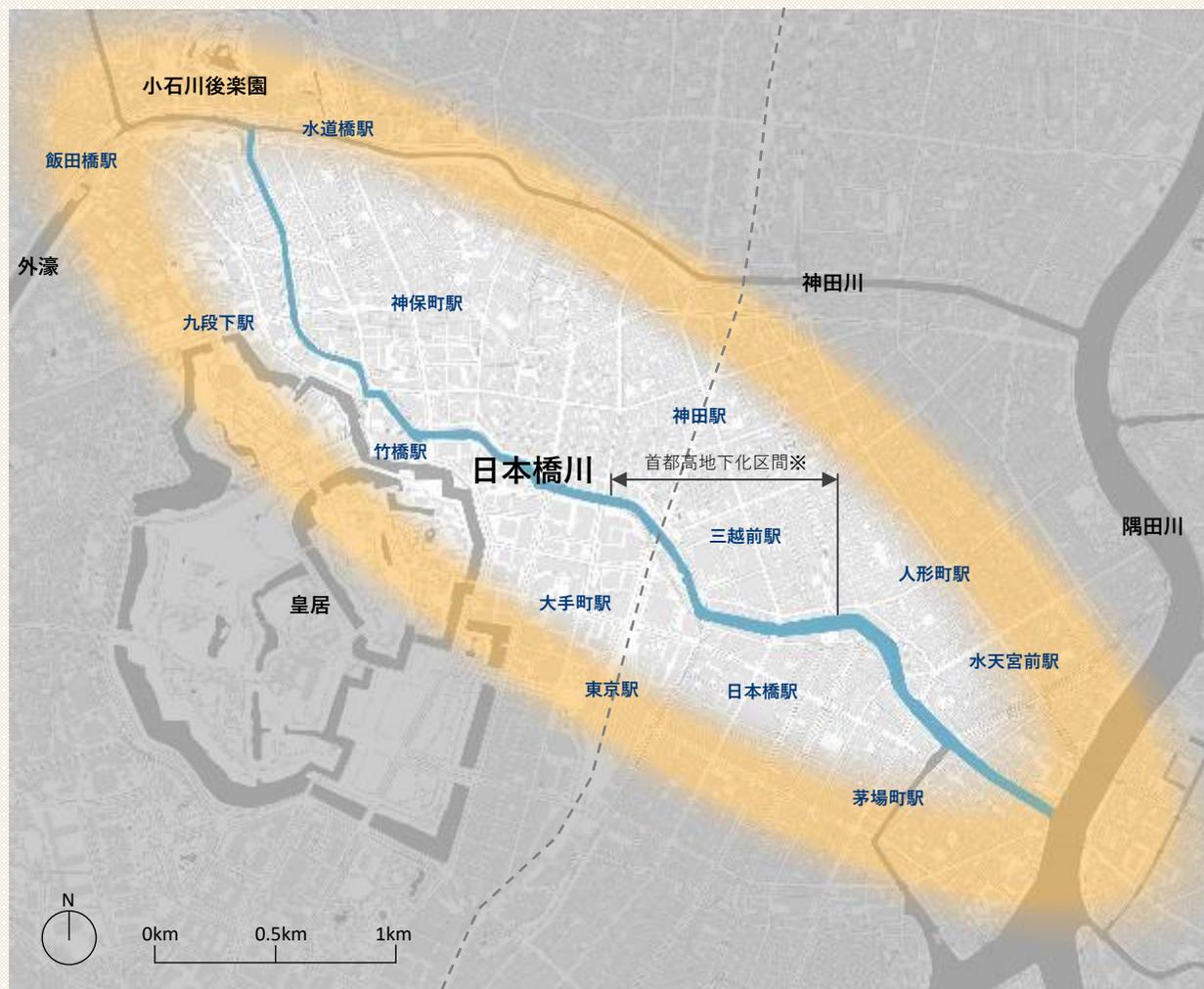


図 対象範囲

基盤地図情報（国土地理院）を加工して作成

【コラム】首都高速道路の地下化

- ◆ 日本橋川上空に架かる首都高速道路は、1964年（昭和39年）の東京オリンピックを翌年に控えた1963年（昭和38年）に開通した。既に建物が密集した東京都心部において、モータリゼーションの急拡大による交通需要の増加に早急に対応するため、川や道路などの公用地上空を使用して建設された。
- ◆ 2000年代になると、首都高速道路の高架橋に覆われた日本橋の景観を一新すべく、「日本橋川に空を取り戻す会提言書」等がまとめられ、首都高速道路の老朽化による更新と川沿いのまちづくりが一体となった事業の検討が進められた。
- ◆ そして、2016年（平成28年）には日本橋川沿いの国家戦略特区の都市再生プロジェクトが開始。2020年（令和2年）には神田橋JCTから江戸橋JCT間の約1.8kmにおける日本橋川上空の首都高速道路高架橋を地下トンネルへ更新する事業が開始した。
- ◆ 現在は、2035年度（令和17年度）の地下ルート開通、2040年度（令和22年度）の高架橋撤去完了に向けて、工事が進められている。



図 事業完了前後のイメージ

出典 首都高速道路株式会社「事業の概要」(<https://www.shutoko.jp/ss/nihonbashi-tikaka/overview/>)

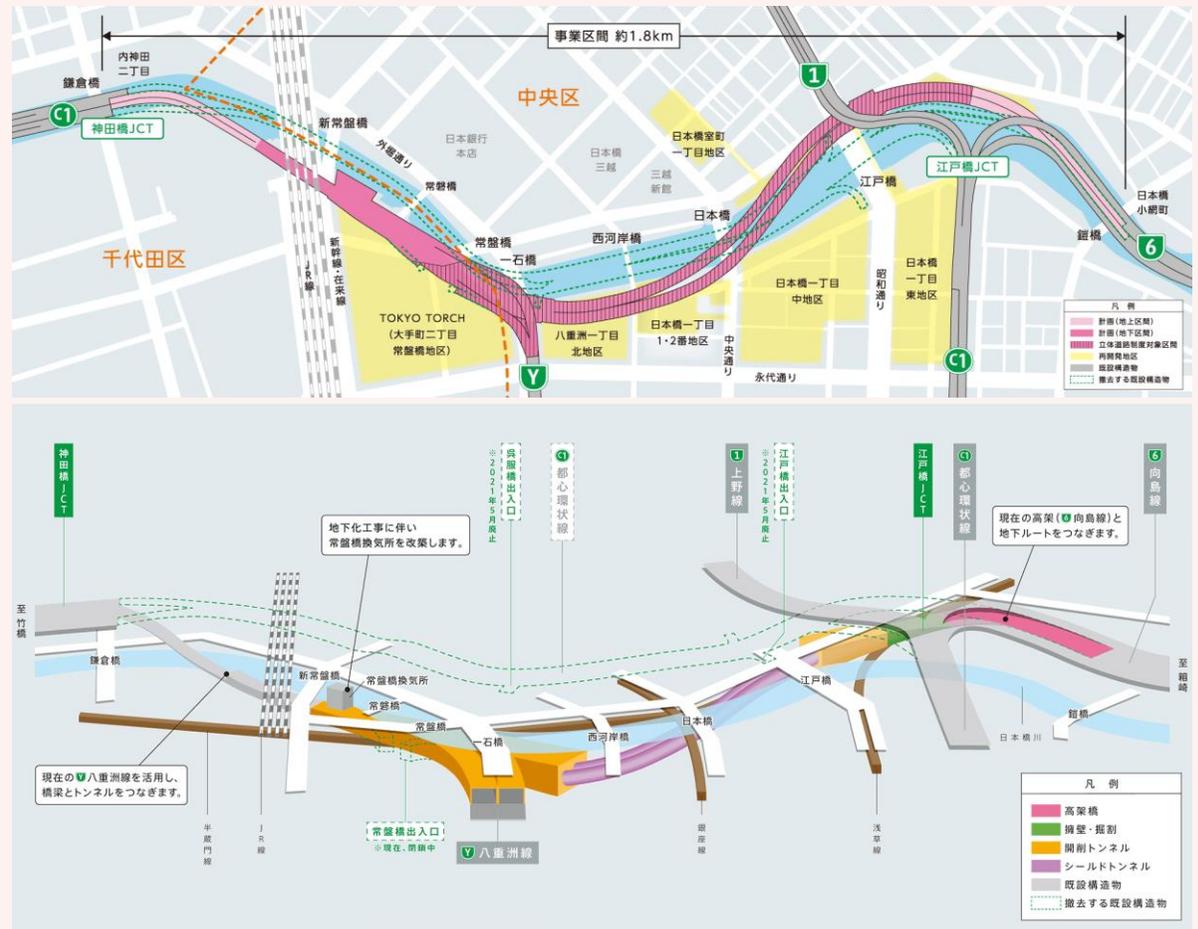


図 首都高速道路地下化の概要

2 日本橋川周辺の現状と課題



(1) 歴史資源・文化／①歴史資源

日本橋川周辺には江戸時代からの多様な歴史資源が集積

【現状】

- ◆ 日本橋川周辺には、江戸城外濠の遺構や明治の近代建築物、震災復興橋梁、復興小公園など、歴史を伺わせる資源が多く残されており、一部は重要文化財や史跡に指定されている。
- ◆ 江戸時代の土地利用は現代の土地利用にも息づいており、江戸時代の屋敷地・幕府用地にはオフィスが、江戸時代の町地には商業施設が立地する傾向がみられる。
- ◆ 町地があった日本橋室町地区、日本橋人形町地区、日本橋地区、明治期以降の大学の立地により発展した神田神保町地区を中心に、創業100年以上の企業が多く立地している。

【課題】

- ◆ 歴史的な石積護岸が残存している一方、工事等により、一部がコンクリートにより整備され、護岸の外観について統一性に欠けている。
- ◆ 地域の歴史性を伝える機会等の仕掛けが不十分である。

図 日本橋川周辺の歴史資源の分布

※図の可読性のため国が重要とする文化財のみ名称記載
 ※「歴史的構造物・歴史資源」は国登録有形文化財、都・区の各種指定文化財を指す

出典 小石川後樂園：（公財）東京都公園協会
 日本銀行：日本銀行
 地図：基盤地図情報（国土地理院）を加工して作成



(1) 歴史資源・文化／②文化

日本橋川周辺では江戸時代から現在まで、多様な最先端の文化を発信

【現状】

祭 ◆ 神田祭・山王祭・深川祭をはじめとする、江戸由来の祭礼行事が現在まで継承されているほか、地域主導の最先端のイベントも開催されている。

食 ◆ 江戸時代、五街道の起点と河岸が存在する交通の要衝であった日本橋には、全国から様々な地域の最先端の食文化が集結していた。川を通じて遠方から運ばれてきた加工品や、魚河岸の魚の加工品、徳川家旧領地出身の商人・職人による商品を取り扱う商業が発達した。

- ◆ 明治時代、近代化・西欧化という社会情勢の変化に合わせ、日本橋周辺では卵を使った商品やフルーツパフェなど最先端の商品が創出された。
- ◆ 現在も、百貨店や物産館には全国の食品が集結し、江戸・明治時代から続く老舗が日本の食文化を発信している。

工芸・芸能

◆ 江戸時代には、江戸切子や江戸小紋が日本橋周辺にて発明されたほか、大通りには呉服店も集積した。人形町周辺には歌舞伎をはじめとする芝居小屋が立地していた。

◆ 現在も、陶磁器・古美術・日本画・現代美術などの多様なジャンルの画廊・ギャラリーが日本橋周辺に多く立地し、文化の発信地となっている（大小様々なホールのほか、映画館なども文化を発信）。

出版

◆ 江戸時代、交通の要衝だった日本橋周辺には書物問屋や錦絵の版元が発達した。

◆ 明治時代には、神田を中心とした武家屋敷跡地に大学が立地し、神保町には書店街が発達し、現在も出版社が立地するなど文化の発信地である。

【課題】

◆ 地域の文化を伝える情報発信の機会等が不十分である。

◆ 文化の保存が行われている一方、時間の経過に伴い継承が困難な技術や行事については、失われるおそれもある。



写真 祭礼行事の様子



図 江戸時代の魚河岸の様子



図 江戸小紋の柄

(2) 河川水質・緑・生物／①河川水質

河川の悪臭、白濁化、スカム等が発生

【現状】

- ◆ 下水道整備等が進んだことにより、河川水質は改善傾向にあるが、日本橋川の水中に溶け込んでいる酸素量が低く※1、硫化水素臭等の悪臭や河川の白濁化、スカムの浮上などが発生している。
- ◆ 夏場を中心として、日本橋川の上流の外濠からアオコが流入している※2。
- ◆ 日本橋川上空の高架橋や流域内の道路の側溝、雨水ますにゴミや塵埃等がたまっており、雨天時には雨水路面排水とともに日本橋川に流入している。

【課題】

- ◆ 河川の硫化水素臭等の悪臭や白濁化の発生、スカムの浮上、アオコの流入など、良好な河川空間の形成に当たり、水質改善に取り組む必要がある。
- ◆ ゴミや塵埃等が雨水排水とともに日本橋川に流入しないよう、流域内の道路等の側溝及び雨水ますの堆積物除去の必要がある。

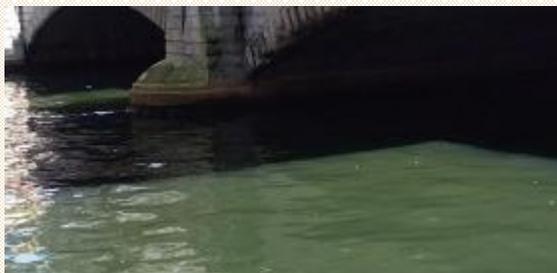


写真 白濁化していない河川の様子 日本橋付近

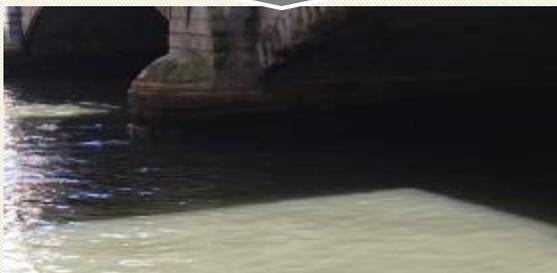
写真 スカムが発生した様子
日本橋付近 (R5.8.15)写真 アオコが流入した様子
あいあい橋付近 (R6.7.2)

写真 白濁化した河川 日本橋付近 (R5.9.13)

写真 雨天時の高架橋からの雨水路面排水
の流入 銚橋付近 (R6.8.30)写真 側溝への雨水排水の流入
出典 国土交通省北海道開発局 帯広開発建設部
(https://www.hkd.mlit.go.jp/ob/tisui/kds/pamp_hlet/kurashi/kurashi/03mizu_ha_dokohe.html)

- ◆ **悪臭**：河床に堆積した汚濁物から硫化水素が発生し、腐った卵のような独特な臭いがする。
- ◆ **白濁化**：表層の酸素と底層の硫化水素が結合し、川の水が白く濁って見える状態
- ◆ **スカム**：河床に堆積した汚濁物の分解によって発生するメタンなどのガスの浮力により汚濁物が水面に浮上

※1 【コラム】 神田川流域（日本橋川）の河川水質 参照
 ※2 【コラム】 日本橋川の上流の外濠における水質浄化の取組 参照

(2) 河川水質・緑・生物／②緑・生物

日本橋川の緑と水のネットワークの整備と生物多様性の保全・回復

- 【現状】◆ 日本橋川では多様な魚類、底生動物類、植物及び鳥類の生息が確認されており、都心の貴重な水辺環境となっている。
- ◆ 日本橋川周辺には緑道や公園等の緑が点在している。
- 【課題】◆ 生物のすみかとなり得る場所は限られており、多様な生物の生息環境や川に近づき環境学習する場の確保が課題である。
- ◆ 緑のネットワークとしてつながっておらず、更なる緑の整備が課題である。

表 日本橋川で確認されている 生物種

分類	日本橋川
魚類	スズキ、ボラ、マハゼ、シモフリシマハゼ、コイ(型不明)、ビリンゴ、アシシロハゼ、アベハゼ、ヌマチチブ等
底生動物類	ヤマトカワゴカイ、ヤマトスピオ、ニッポンドロソコエビ、カワグチツボ、スジエビ、ユビナガスジエビ、コウロエンカワヒバリガイ、イガイダマシ等
植物	オッタチカタバミ、ウスベニチチコグサ、レンギョウ、メマツヨイグサ、トウネズミモチ、セイタカアワダチソウ、フサフジウツギ等
鳥類	カワウ、カルガモ、オナガガモ、ユリカモメ、ヒヨドリ、スズガモ等

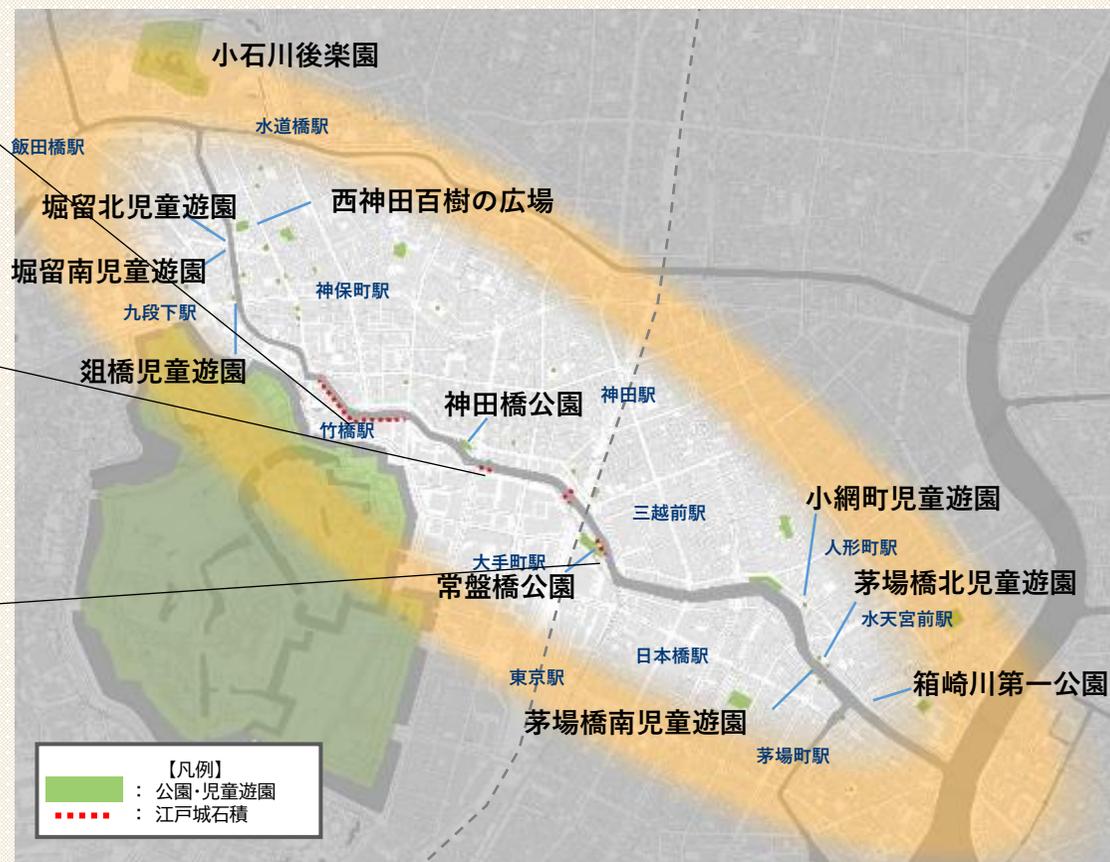
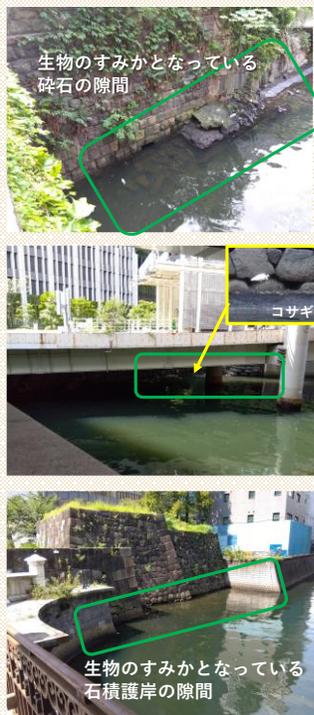


図 日本橋川周辺の生物の生息状況とみどり

注：青字は「東京都の保護上重要な野生生物種（本土部）-東京都レッドリスト（本土部）2020年版」掲載種もしくは「環境省レッドリスト2020の公表について」掲載種、斜字は「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」掲載種

出典 生物種：神田川流域河川整備計画の情報を元に作成
地図：基盤地図情報（国土地理院）を加工して作成

【コラム】東京都区部下水道の整備と合流式下水道の改善

- ◆ 明治初期の東京では、疫病のコレラの流行により多くの死者が発生するとともに、低地などでは大雨による浸水被害が頻発していた。
- ◆ このため、トイレの水洗化などによる衛生環境の改善と雨水の速やかな排除を同時に対応するため、合流式下水道による整備が採用された。
- ◆ 区部下水道は、約 8 割が合流式下水道で整備されており、古くから市街化が進展した国内の大都市や世界主要都市の多くも合流式下水道による整備を採用している。
- ◆ 合流式下水道の特徴は、弱い雨の日は、地面や道路の汚れは雨と一緒に下水道管に集められ、水再生センターで処理される。
- ◆ 一方、強い雨が降ると、市街地を浸水から守るため、汚水混じりの雨水が河川沿いの吐口やポンプ所から河川や海などに放流される仕組みとなっている。
- ◆ 平成15年には、下水道法施行令が改正され、雨天時放流水質基準が令和 6 年度から強化された。
- ◆ 合流式下水道の改善の主要な取組として、
 - ① 雨水吐口やポンプ所からのごみなどの流出を抑制する施設の整備
 - ② 雨天時の下水をより多く水再生センターへ送るための下水道管の整備
 - ③ 降雨初期の特に汚れた下水を貯留する施設の整備
 などを実施し、下水道法施行令で定められた分流式下水道並みの放流水質基準を達成するための施設整備が令和 5 年度末に完了した。
- ◆ このように、下水道は安全で快適な都市の実現に大きく貢献してきた。

都市	合流式 (%)	分流式 (%)
東京 23 区	82%	18%
大阪市	96%	4%
名古屋市	56%	44%
ニューヨーク	60%	40%
パリ	87%	13%
ローマ	89%	11%

図 主要都市における合流式下水道の採用割合

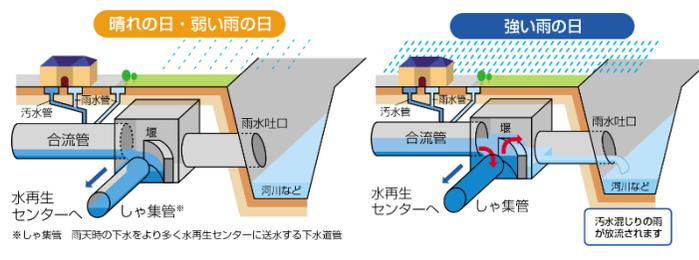
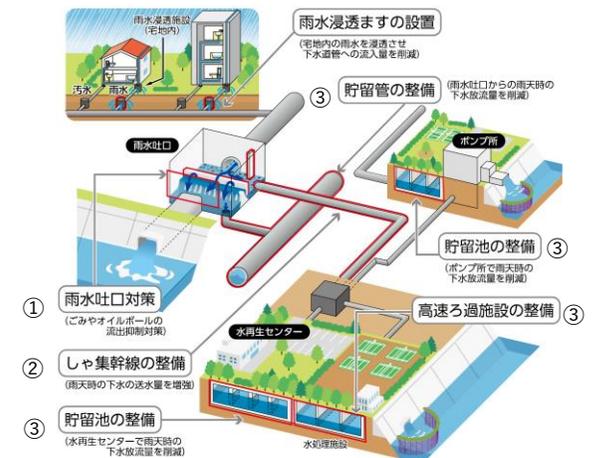


図 合流式下水道の特徴



図 日本橋川流域における下水道施設の現況



合流式下水道の改善 主要な3つの取組実績 区部全域（令和5年度末）	
① 雨水吐口からのごみなどの流出を抑制する施設の整備	約730箇所
② 雨天時の下水をより多く水再生センターへ送るための下水道管等の整備	約155km
③ 降雨初期の特に汚れた下水を貯留する施設の整備	約170万m ³

図 合流式下水道の改善の主要な3つの取組イメージと実績

出典 東京都下水道局資料

【コラム】神田川流域（日本橋川）の河川水質

- ◆ 都市の急激な発展により都市河川の水質は汚染が進んでいたものの、近年では下水道の整備や水再生センターから処理水の放流によって各種数値は改善傾向にある。
- ◆ 有機汚濁の指標であるBODは、昭和30～40年代の神田川で30mg/L程度であったが、神田川・日本橋川ともにBODが5mg/L程度まで改善し、現在は環境基準であるC類型の基準値を満たす水質となっている。
- ◆ 水中に溶け込んでいる酸素量（DO）は、神田川では、昭和30～40年代は低い値であったが、BODの改善とともに増加し、近年では概ね一定で推移している。
- ◆ しかし、日本橋川（西河岸橋）では、DOが環境基準を下回る濃度で推移しており、酸素量低下に伴い水質や水生生物の生息環境への影響が懸念される。

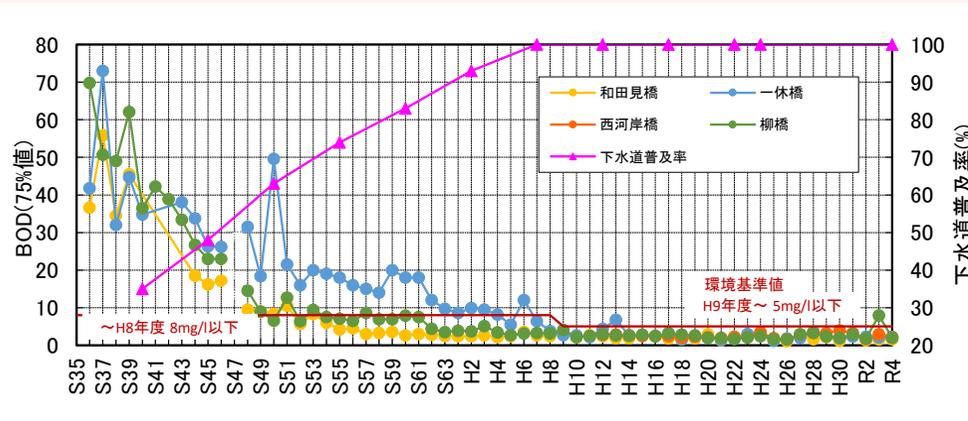


写真 昭和30年代前半の神田川



写真 神田川の江戸川橋上流
処理水放流により河川環境を改善

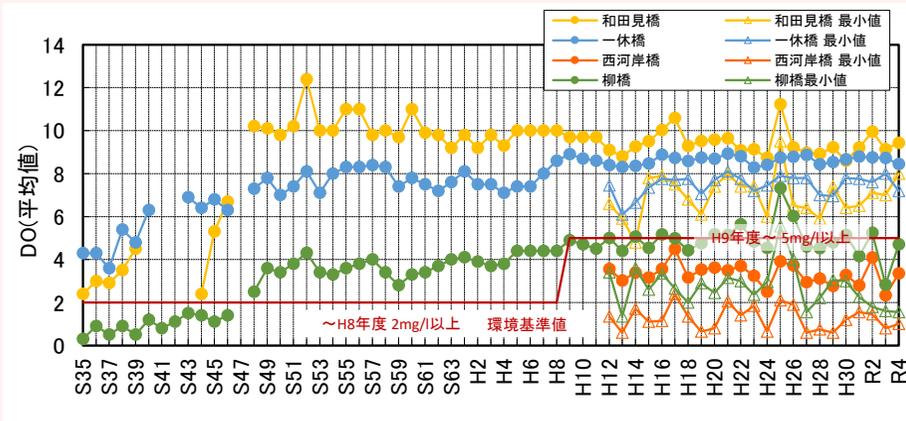


図 水質調査地点

図 長期的なBOD、DO（溶存酸素）の経年変化

BOD（生物化学的酸素要求量）水中の有機物量の指標であり、代表的な水質汚濁の指標。
 : S46以前は年平均値（東京都公害研究所資料）、
 S48以降は75%値（東京都公共用水域水質調査結果）
 DO（溶存酸素）水中に溶けている酸素の量であり、魚類等の呼吸に不可欠なもの。
 : 公共水域水質測定結果（東京都環境局）、
 都内河川・内湾水質調査資料（東京都公害研究所、DOは35～47年度を使用）
 下水道普及率：人口普及率（東京都下水道局）

和田見橋測定値：S35～39は中野柳橋の測定値、一休橋測定値：S43以前のデータは高戸橋、S44～58は江戸川橋の測定値
 S46年以前は暦年、S48以降は年度での評価、神田川と日本橋川の環境基準は平成9年度にD類型からC類型に変更

(3) 歩行者ネットワーク・舟運ネットワーク／①歩行者ネットワーク

川沿いを巡るための連続した歩行者空間の整備

【現状】

- ◆ 緑道等の川沿いの歩行者動線が整備されている区画も一部存在するものの、建物が護岸に近接し川沿いを歩けない区画も多く、川沿いに横断歩道が少ない、階段によりバリアフリーな通路となっていないといった箇所があり、川全体では歩行者ネットワークが繋がっていない。
- ◆ まちから川に向かう主要動線は、幅員の広い道路であり、視認性が高く、歩道も整備されており、川へアクセスしやすい状況である。
- ◆ 川へアクセスするための案内情報や周辺の歴史資源・文化の案内情報が少ない。
- ◆ 川を渡れる箇所が少ない。

【課題】

- ◆ 日本橋川に架かる橋のもとには橋詰広場が存在するが、歩行者ネットワークの中で十分に活用されていない。
- ◆ 誰もが川へアクセスし、川沿いを巡ることができるような連続した歩行者空間がない。
- ◆ 駅から川へのアクセス性に欠けるなどネットワークが不十分である。
- ◆ 対岸に徒歩で行きづらいなど、両岸での回遊性が不十分である。

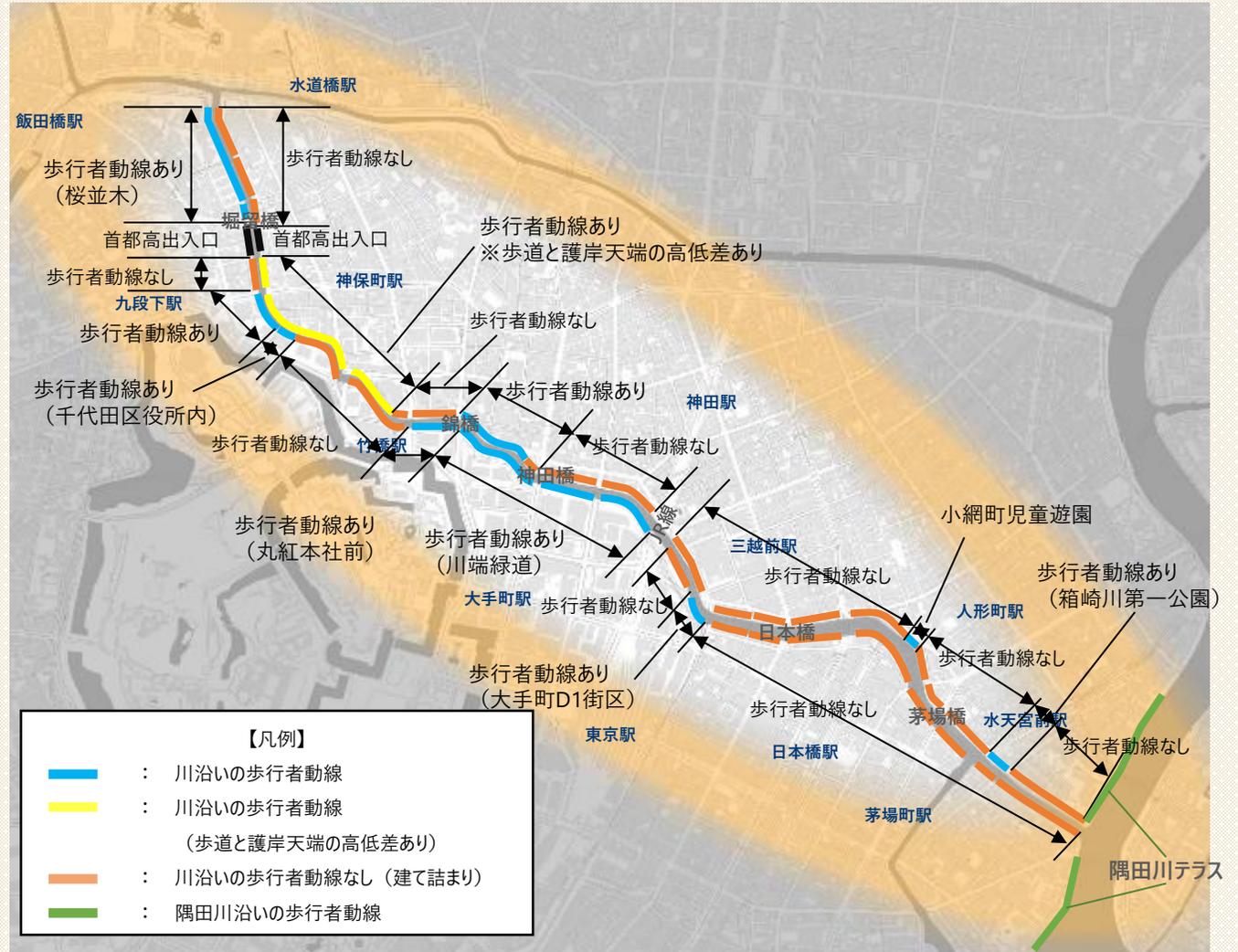


図 日本橋川沿いの歩行者導線の整備状況

(3) 歩行者ネットワーク・舟運ネットワーク／②舟運ネットワーク

船着場の舟運などへの更なる活用

【現状】

- ◆ 日本橋川には船着場が4か所整備されており、1か所は令和8年末に向けて整備中である。
- ◆ 下流で接続する隅田川においては、船着場を活用した舟運活性化の取組が行われている。
- ◆ 通勤利用者向けの日本橋～豊洲航路が定期運航しているが、花見の時期などに運航されている観光周遊航路の運航は不定期である。

【課題】

- ◆ 船着場の入口が奥まっておりに分かりづらい。開放されている船着場においても、運行情報が分かりにくいことや、船を待つ間に雨風をしのぐ場所が無い。
- ◆ 周辺の船着場と連携した新たな舟運航路の形成が課題である。



写真 船着場の入口

(上：常盤橋、下：千代田区庁舎前)



写真 観光周遊船の様子

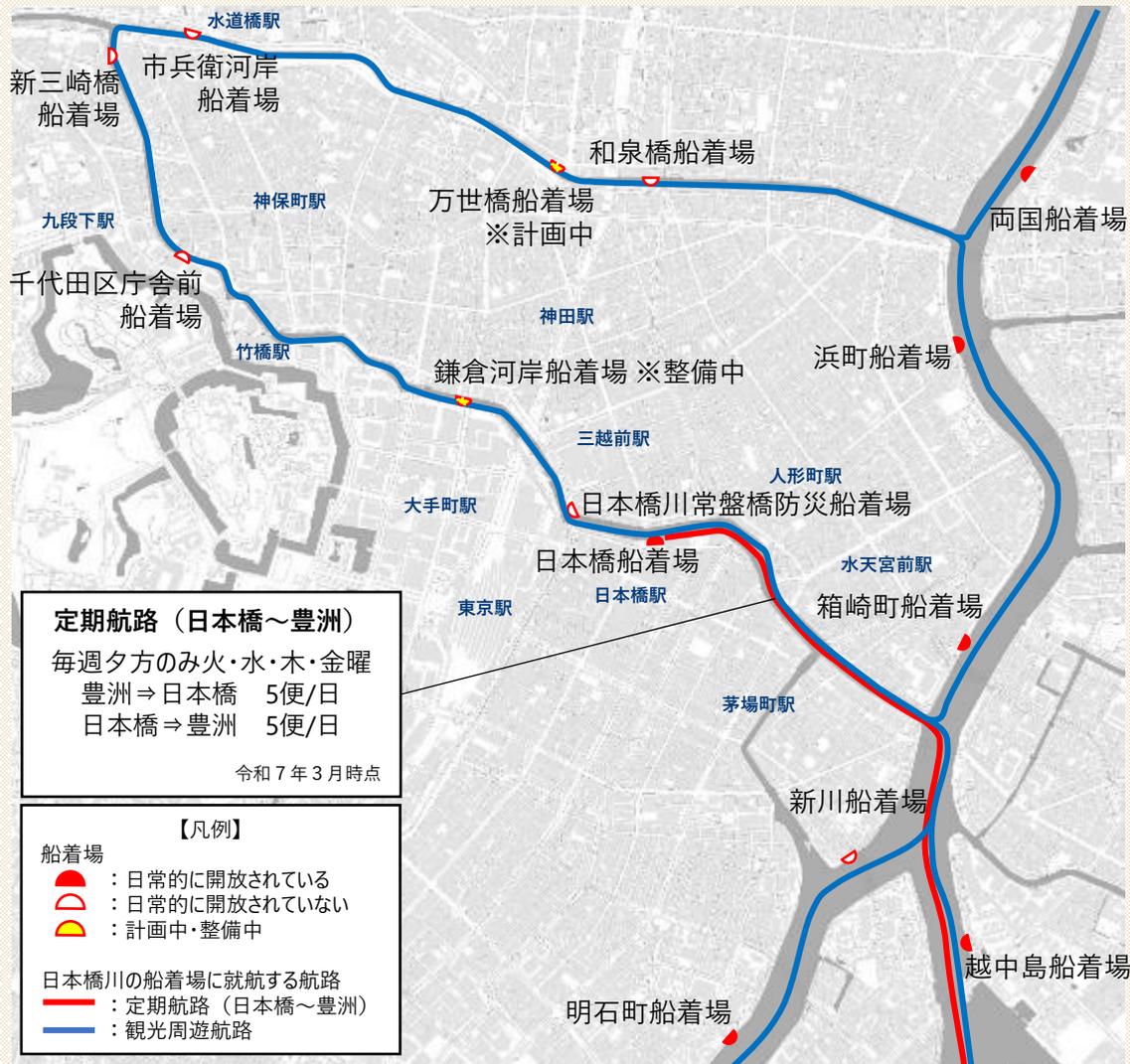


図 日本橋川の船着場の活用状況

(4) にぎわい空間・景観／①にぎわい空間・憩い空間

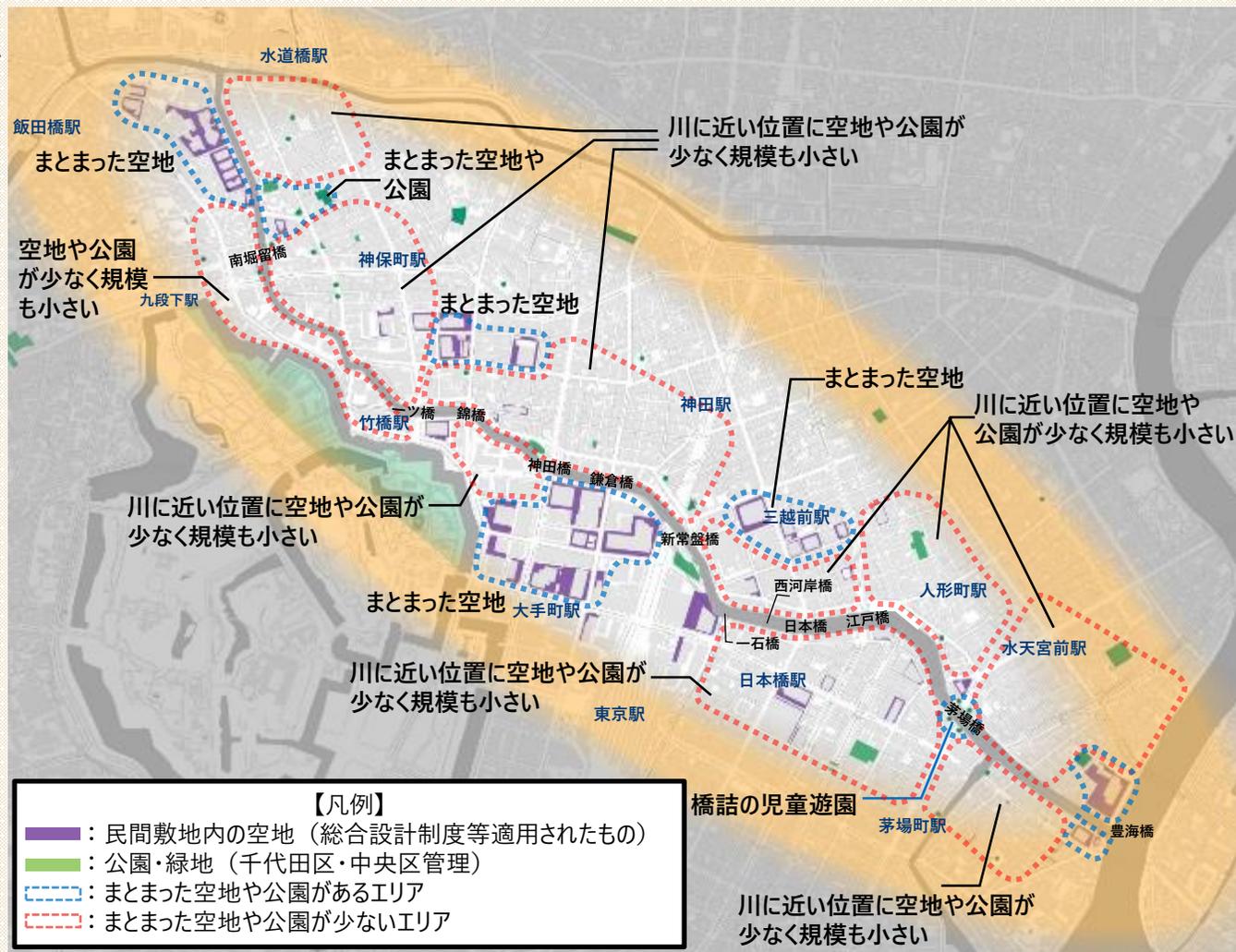
川に近づいて川を楽しむ空間の整備

【現状】

- ◆ まとまった空地や公園があるエリアも存在するが、川に近い位置に空地や公園が少ない、又は川に近い位置の空地や公園の規模が小さいエリアも多く存在する。
- ◆ 首都高高架橋により、薄暗い印象を与え、人が近づきにくい水辺空間になっている。
- ◆ 伊勢湾台風と同規模の台風による高潮を想定した護岸が整備されている。

【課題】

- ◆ 川のポテンシャルを最大限まちづくりにいかすためには、川に近づいて川を楽しむまとまった空間の整備が必要である。
- ◆ 祭礼行事や地域のイベントで活用できるような、水辺空間がない。(神田祭の場合、神幸祭の巡行路が当時と異なる。神輿と山車が橋を渡る時は祭の見せ場の一つであったと言われているが、そういった活用ができる橋詰空間や水辺空間がない。)
- ◆ 近代土木の代表ともいえる首都高高架橋のダイナミックな景観をいかしきれておらず、建物の顔を川に向けることとあわせて、にぎわいを生み出すことが必要である。
- ◆ 気候変動を考慮した高潮に対して、高さが不足する護岸や橋梁があり、嵩上げた場合にはまちとの分断が生じるおそれがある。



出典 地図：基盤地図情報（国土地理院）を加工して作成

図 日本橋川周辺の空地や公園の整備状況

(4) にぎわい空間・景観／③開発動向

都市再生緊急整備地域に指定され、大手町地区や日本橋地区を中心に開発が進行

【現状】

◆ 大手町地区・日本橋地区では、都市再生特別地区が多く指定され、エリア一体で開発の動きが活発である。

【課題】

◆ 今後も大規模な開発が見込まれるなか、開発ごとに沿川施設等のしつらえがばらばらになるおそれがあるため、統一感と調和のとれた景観に関するルールづくりが必要である。

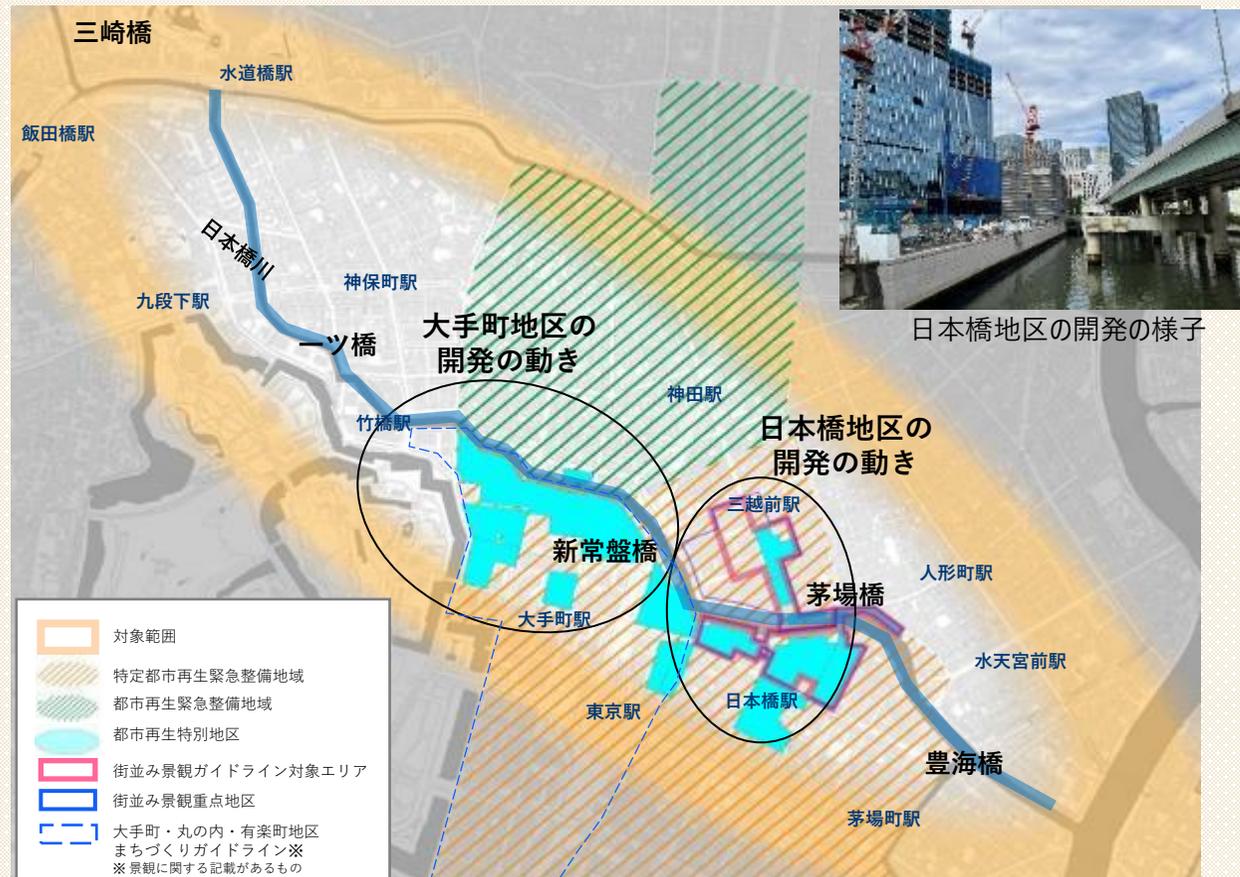


図 日本橋川周辺の開発の動向

都市再生緊急整備地域・・・

都市の再生の拠点として、都市開発事業等を通じて緊急かつ重点的に市街地の整備を推進すべき地域

特定都市再生緊急整備地域・・・

都市再生緊急整備地域のうち、市街地の整備を推進することが都市の国際競争力の強化を図る上で特に有効な地域

都市再生特別地区・・・

都市再生緊急整備地域内において定められる地区であり、既存の用途地域等に基づく規制にとらわれず自由度の高い計画を定めることにより、容積率制限の緩和等が可能となる。

街並み景観重点地区・・・

地域の景観に大きな影響を及ぼす大規模プロジェクトが行われる地区等、景観形成上重要な地区

街並み景観ガイドライン・・・

街並み景観重点地区の協議会が作成する、建物の配置・色・デザイン、広告物の大きさや形等を定めたガイドライン

協議会はガイドラインに基づき街並み景観づくりのコントロールを行うことができる。

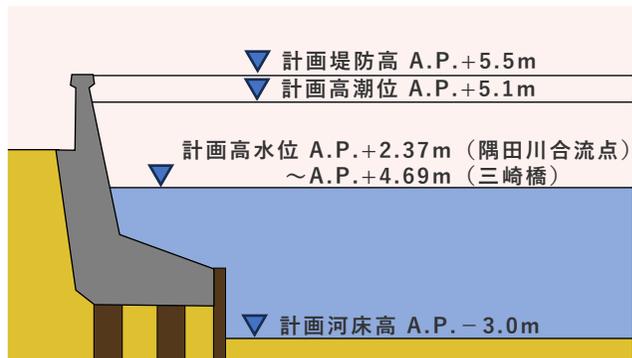
【コラム】日本橋川における治水の安全性について

- ◆ 風水害から都民の命と暮らしを守るため、神田川流域を含む都管理河川では「洪水対策」と「高潮対策」に取り組んでいる。

【洪水対策】 時間50ミリを超える降雨に伴う水害が頻発していることを踏まえて平成24年に策定した「中小河川における都の整備方針」に基づき、「年超過確率 1/20規模の降雨（区部の河川では時間75ミリ）」に対応するため、河道や洪水を貯める調節池等を整備している。

【高潮対策】 過去にキティ台風等の高潮により都内で広範囲に甚大な浸水被害が発生したことから、国内で最大の被害をもたらした伊勢湾台風と同規模の台風による高潮に対して安全であることとしている。

- ◆ 6河川からなる神田川流域は総延長52.3km、流域面積 約105km²で、日本橋川は神田川から分派し隅田川に合流する河川延長4.8kmの1級河川である。
- ◆ 洪水対策として、日本橋川においては三崎橋で流量230m³/sを流す河道が必要であり、その時の水位はA.P.+4.69m（計画高水位）である。
- ◆ 高潮対策として、日本橋川においてはA.P.+5.1m（計画高潮位）の高さが必要であり、防潮堤の高さは、波の打上高を加えたA.P.+5.5mとしている。



- ・ **計画高潮位**：想定される最大規模の台風（伊勢湾台風級）の襲来等により、高潮が発生したときの海面上昇と、満潮位を足したもので、高潮対策施設の基準となる水位。
- ・ **計画高水位**：「年超過確率 1/20規模の降雨（区部の河川では時間75ミリ）」の流量を安全に流すことができる河道の水位。

※ 気候変動対策として、令和7年3月に「河川における高潮対策整備方針」を策定した。この方針において日本橋川では、橋梁が多く、その架け替えや陸閘の整備には多くの課題があるため、将来の気候変動による海面上昇や台風の強大化を踏まえた高潮対策として、上下流部に水門を整備する方針としている。



写真 平成17年9月4日 妙正寺川
(中野区提供)



写真 昭和24年8月 キティ台風時の浸水状況
(墨田区錦糸町)

※ 出典：東京都建設局WEBサイト
<https://www.kensetsu.metro.tokyo.lg.jp/river/jigyo/kasenbu0217>

(6) 地域との連携／にぎわいづくり・仕組みづくり

日本橋川周辺のにぎわいを持続的に創出する仕組みづくり

【現状】

- ◆ 日本橋川周辺には地域団体やエリアマネジメント団体が多数存在し、高質な公共空間の維持管理活動等に取り組んでいる団体もある。江戸由来の祭礼行事や地域のイベントが、日本橋をはじめとする公共空間等を活用して開催されている。日本橋川や日本橋等の清掃活動も行われている。
- ◆ エリアマネジメント団体や地域団体の多くは、地元企業の協賛金や関係者からの会費等で運営されている。
- ◆ 臨海部では、水面やその上空を活用してeSG先行プロジェクトで先端技術の実証実験が進められている一方、日本橋川では水面等を活用した実証実験等の取組はほとんど行われていない。

【課題】

- ◆ 日本橋川沿いの水辺や水面そのものを利用し、にぎわい創出につなげているケースは少ない。また、関係者が連携して行うための仕組みがない。
- ◆ 様々な業種の企業や店舗、それを訪れる国内外の人々に対し、ゆとりや潤いをもたらす魅力的な環境の創出が求められている。
- ◆ 河川の水面等における先端技術・新技術の実験を活用する等、水辺のにぎわいを創出するための取組を検討する必要がある。

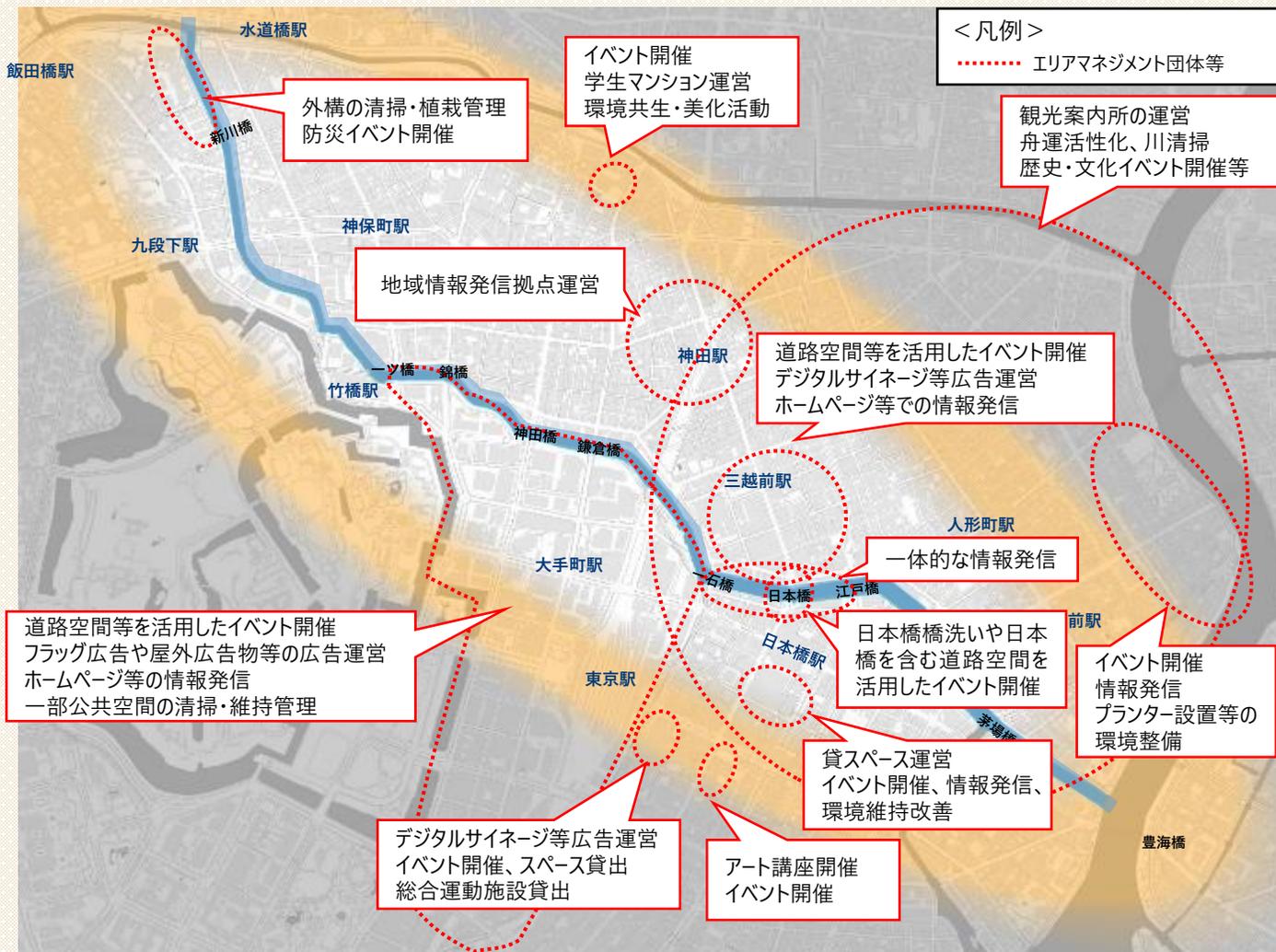
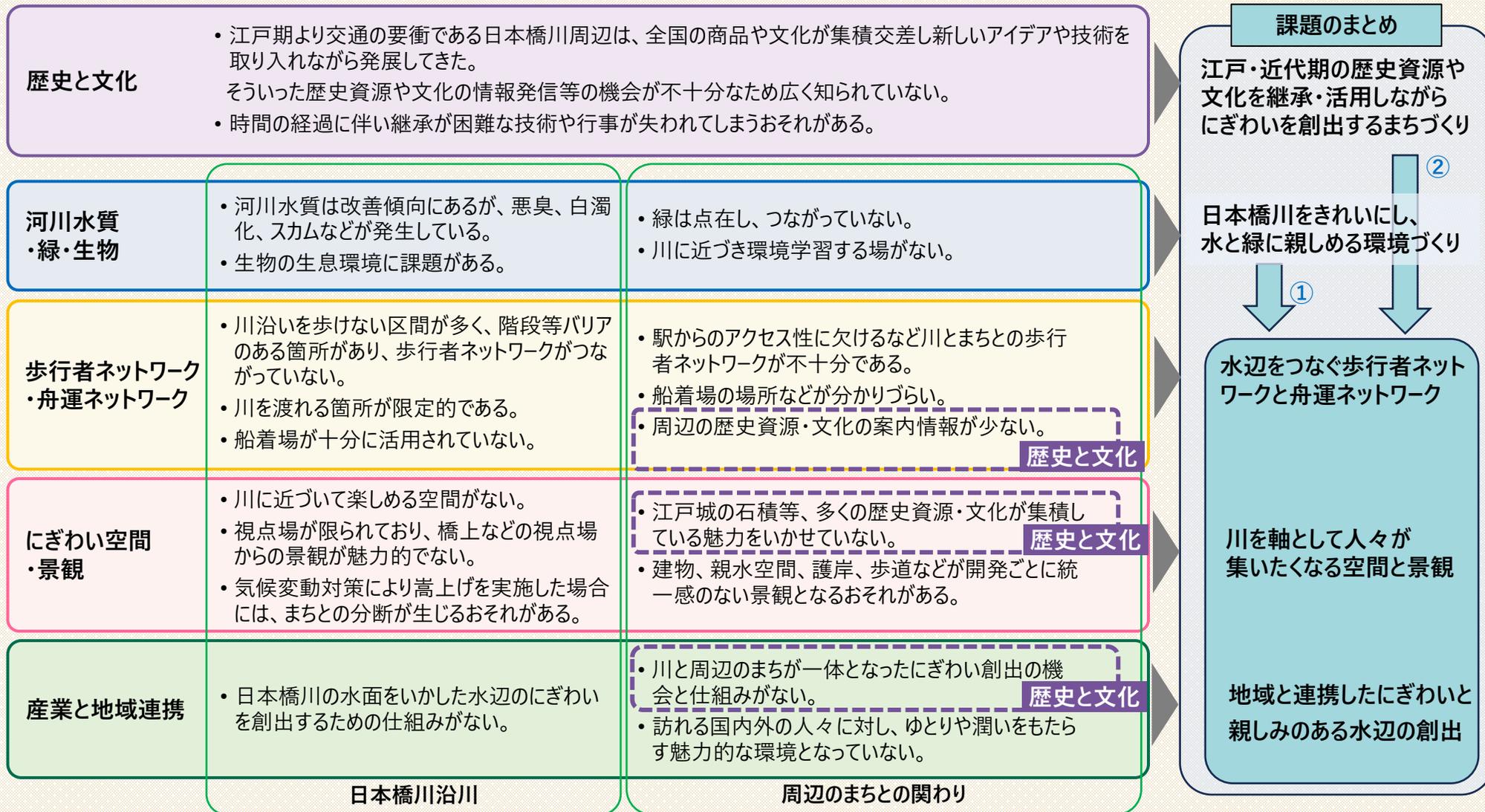


図 日本橋川周辺のエリアマネジメント団体・地域団体等の活動状況の例

(7) 日本橋川周辺のにぎわい創出を推進していく上での課題のまとめ

- ① 川を将来きれいにすることが、歩行者・舟運ネットワークやにぎわい空間、景観の形成、産業や地域連携といった課題の解決につながる。
 ② ①の課題解決に当たっては、江戸・近代期からの歴史資源と文化を継承・活用しながら取り組むことが必要



3 日本橋川周辺のまちづくりの将来像



3 日本橋川周辺のまちづくりの将来像

- ❖ 首都高地下化工事が本格化し、大規模開発の竣工を間近に控えるなど、日本橋川周辺の景色がいよいよ変わり始める。
- ❖ これを機会に、日本橋川を中心に様々なエリアの特色をいかし、江戸・近代期の歴史資源や文化を継承・活用しながら、日本橋川の周辺地域全体で美しく魅力的な景観を備え、にぎわいを創出していくためには、再開発等の動向を捉え、川に顔を向けたまちづくりに、官民様々な関係者が連携して取り組む必要がある。

日本橋川周辺の特長

江戸・近代期

- ・交通の要衝である日本橋を中心として全国様々な地域の文化が交流
- ・江戸期には大名屋敷や町人地など、近代期には政府・教育機関などが集積



- ・最先端の商業・文化（金座、呉服、食、工芸、祭礼行事等）
- ・学校、出版社、書店

現在

- ・周辺の交通利便性が向上
- ・日本・東京をけん引する国際金融やビジネス、商業、観光及び文化の発信拠点



- ・国際交流都市として持続的な成長を生み出す都心型 MICE、高度金融人材サポート等
- ・イノベーションによる新産業（ライフサイエンス産業、宇宙産業、スタートアップ企業等）

江戸東京文化

日本橋川周辺では、「江戸」から続く伝統を基盤に、多様な人々と文化が交差し、新しい技術やアイデアを取り入れながら、発展し続ける首都「東京」をつくり上げた文化を築いてきた

日本橋川周辺で培われてきた「江戸東京文化」をまちづくりの要としていかし、世界遺産登録を目指す取組とも足並みをそろえつつ、日本橋川を中心とした新たな水の都の創造に向け、日本・東京を代表するにぎわいのあるまちづくりを推進していくための将来像を定める。

歴史と未来に出会える、日本橋川

～日本橋川を中心とした新たな水の都の創造～



地元の祭りとの連携



水辺空間で祭り

江戸東京文化を
継承・発展させながら
まちづくりにいかす



江戸城石積
(常盤橋御門跡)



重要文化財
(三井本館)

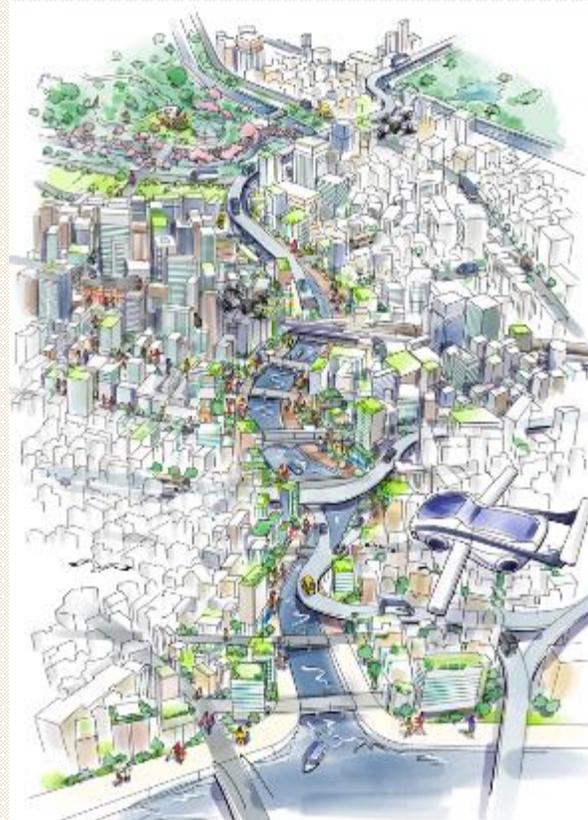
きれいに なった日本橋川で
水と緑に親しめる環境を創出



親しめる水質に改善



生き物観察会



水辺を つなぐ 歩行者と舟運
ネットワークを形成



連続的な歩行者空間



舟運ネットワークの充実

集い・つながることで官民連携により
まちが新しいコトを うみだす



新技術等の実験場
(モバイルグリーンなど)



新しい産業拠点を形成
(宇宙産業など)

川を軸とした魅力的な水辺空間に
人々が 集う まち



高架橋ライトアップ



歴史資源をいかす

4 日本橋川における水辺空間の再生方針

日本橋川における水辺空間の再生方針（都心の新たなインフラ軸）

将来像の実現に向け、きれいになった日本橋川という河川4.8kmを歩行者や緑のネットワーク空間を備えた都心の新たなインフラ軸と位置付け、舟運ネットワークの充実等と合わせて水辺空間を再生する。



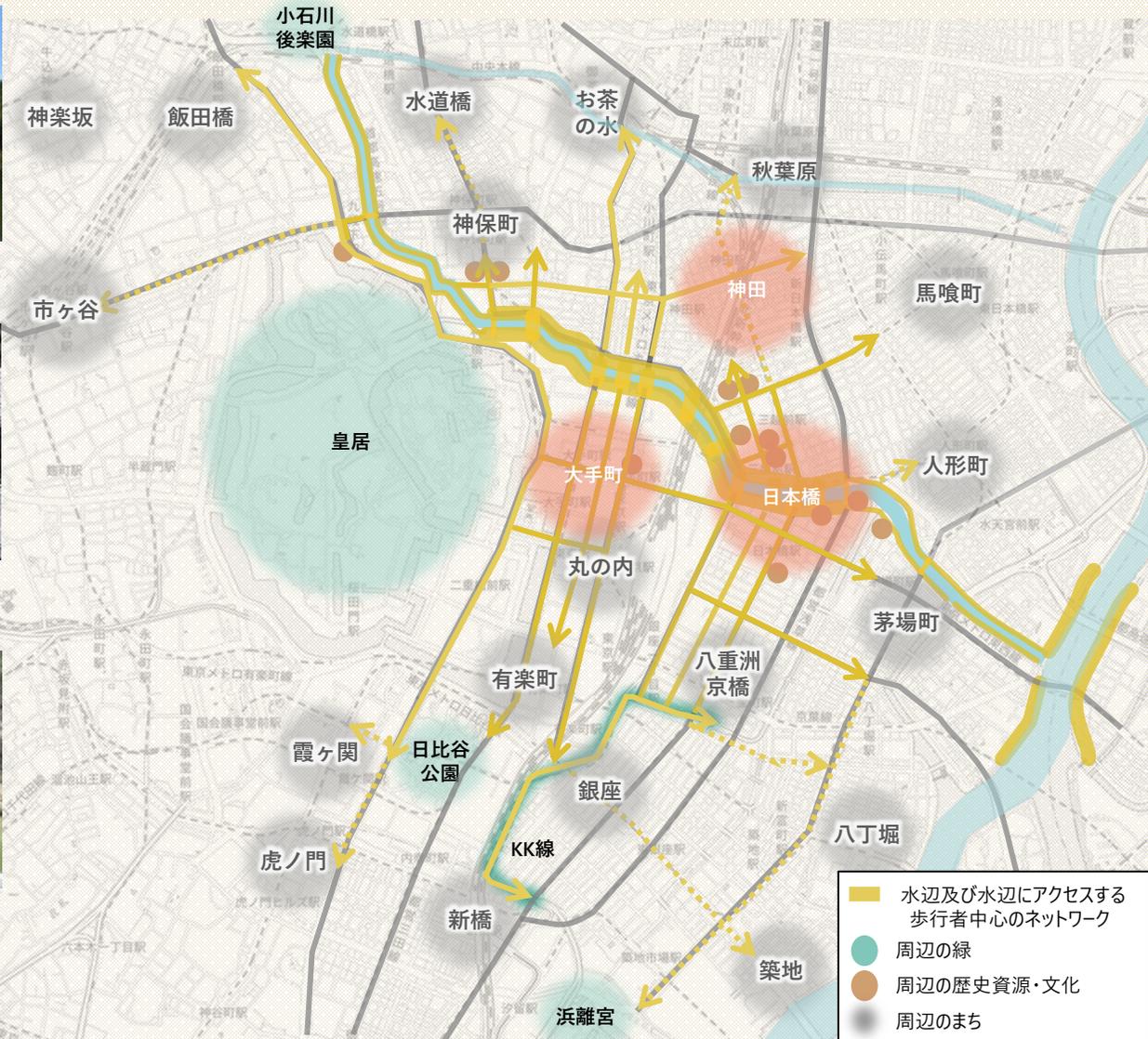
小石川後樂園



舟運



江戸城常盤橋御門跡



日本銀行本店



日本橋



KK線

4 日本橋川における水辺空間の再生方針

水の都の創造に向けて、官民様々な関係者が連携し河川の更なる水質改善と川を中心としたにぎわいの創出に取り組むこととし、世界遺産登録を目指す取組とも足並みをそろえながら、沿川で培われてきた「江戸東京文化」をいかして「きれいに」「つなぐ」「集う」「うみだす」をコンセプトに、まちづくりを推進する。

江戸東京文化

人や資源の集積をいかし、常にその時代の新しいコトを生み出してきた「江戸東京文化」を継承・発展させ、新しい技術や考え方も取り入れながら、未来志向で水辺空間の再生に取り組む。

	日本橋川での取組	周辺のまちとの連携（沿川含む。）
きれいに	<p>水と緑に親しめる環境を創出</p> <ul style="list-style-type: none"> 水質改善（浚渫、水質浄化施設の設置、貯留施設の設置、雨水浸透施設の設置、部分分流化、放流先変更、外濠からの導水等） 生物の生息環境をまもり、広げる。 	<ul style="list-style-type: none"> 日本橋川沿川の緑と周辺の緑をつなぐ。 生物観察や環境学習を楽しむ機会をつくる。
つなぐ	<p>水辺をつなぐ歩行者と舟運ネットワークを形成</p> <ul style="list-style-type: none"> 歩行者ネットワークの形成（川の両岸に様々な高さの連続的な歩行空間を整備、道路リメイク、歩行者用橋梁の配置等） 新規舟運航路の形成 	<ul style="list-style-type: none"> 歩行者ネットワークの形成（道路リメイク、駅等からの通路整備等） 船着場（モビリティハブ）の案内や待合機能を備えた利便施設を整備 歴史資源・文化のサインや案内板等を設置
集う	<p>川を軸として人々が集いたくなる空間と景観を創出</p> <ul style="list-style-type: none"> 橋詰広場を中心に人々が集う拠点を整備 川を軸とした景観形成 首都高高架等のライトアップ等による夜間景観 高潮水門により、まちと一体的な治水対策を実施 	<ul style="list-style-type: none"> 歴史的建造物等をいかす情報発信やライトアップ 公共施設等（護岸、親水空間、橋梁、道路等）のしつらえに関する統一的な考え方を共有 川に顔を向けた建築物の誘導
うみだす	<p>官民連携により新しいコトを創出</p> <ul style="list-style-type: none"> 水面や水辺を実証実験の場とするなど次世代技術の活用を図り、新しいビジネスを創出 	<ul style="list-style-type: none"> にぎわい創出のための官民連携の仕組み 官民多様な主体が公共空間で多彩な活動ができる環境をつくる。

人や資源の集積をいかし、常にその時代の新しいコトを生み出してきた「江戸東京文化」を継承・発展させ、新しい技術や考え方も取り入れながら未来志向で水辺空間の再生に取り組む。

様々な歴史資源・文化を歩行者ネットワークでつなぎ、まち全体で活用していく。さらに、AR※等の積極的な活用により、視覚及び聴覚で仮想的に江戸東京文化を疑似体験できるような環境を整えていく。

- 日本橋川周辺の歴史資源・文化を身近に感じられるよう、サインや案内板等の設置及び歴史・文化を体験できる環境を整え、回遊性を高める。
- 情報発信やライトアップ等により、歴史・文化を引き立てる歴史的建造物等をいかす。
- 護岸の修景は、既設の石積や周辺の景観との調和を図る。
- 晴れ舞台となる水辺空間を整備し、江戸由来の祭礼行事や地域のイベント等にいかす。
- 歴史的建造物等への案内板の設置等により歴史資源・文化の魅力をいかす。
- AR※等を活用した歴史・文化体験ができる環境を整える。



写真 歴史的建造物（重要文化財・日本銀行本店）



写真 歴史的建造物（重要文化財・日本橋）



写真 案内板の例（一橋門跡）



写真 江戸由来の祭礼行事の様子



写真 AR※のイメージ（TOKYO HUNT!）



写真 AR※のイメージ（姫路城大発見）

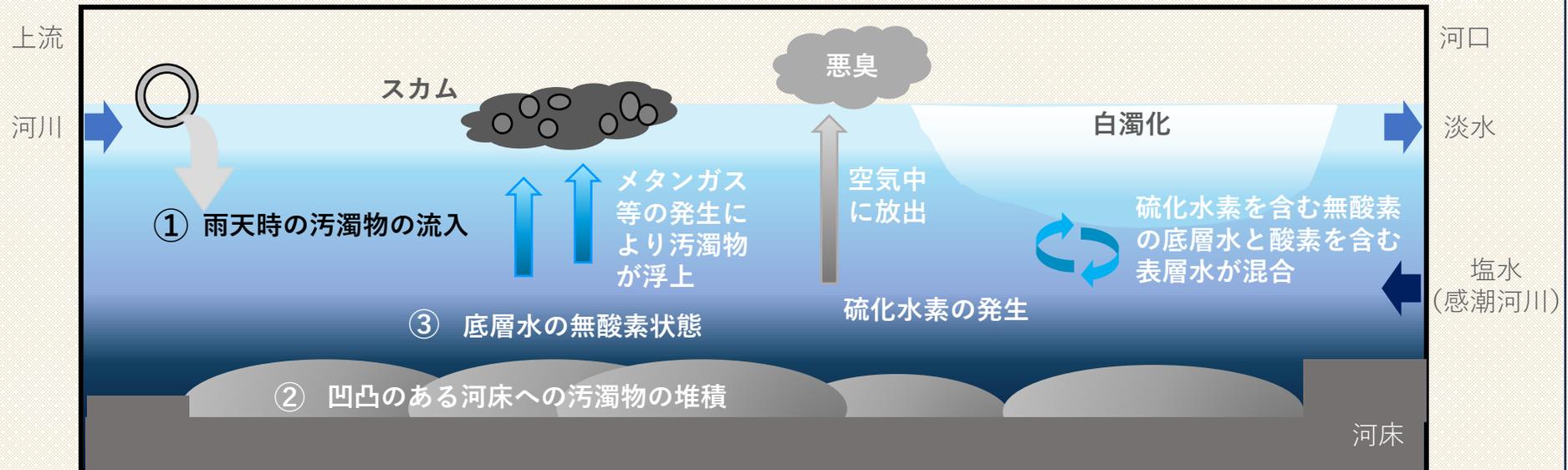
※仮想空間の情報を現実世界に重ね合わせて表示するデジタル技術

人々が水辺に近づくことができるような水環境の創出、水生生物の生息環境の改善を目指し、水質改善とみどりの形成を通じて、日本橋川の自然資源としての価値の更なる向上に取り組む。

①人々が水辺に近づける水質の改善に取り組む

- 水に親しむことができる、「においのない、白濁化しない、スカムが発生しない」水質を目指し、官民連携して水質を改善する。
- 水質モニタリング及び水質シミュレーションを継続して実施し、水質を改善するための具体的な水質目標や取組内容を決めていく。（日本橋川では、河川の悪臭、白濁化、スカムが以下のようなメカニズムで発生していると想定される。）
- 外濠からのアオコの流入抑制に向けた取組を実施する。

<感潮河川で一般的に想定される水質悪化のメカニズム（イメージ）>



<想定メカニズムから有効と考えられる水質改善策>

- 河床の汚濁物堆積への対応 (②への対応)
- 雨天時の河川への汚濁物等の流入を削減 (①への対応)
- 無酸素状態の改善 (③への対応)

<その他有効と考えられる水質改善策>

- 導水
- 流域内の道路等の日常の維持管理でゴミ等の河川への流入が削減できるよう側溝、雨水ますの清掃などを実施

①人々が水辺に近づける水質の改善に取り組む

他河川における取組例（具体的な水質改善の取組を検討するに当たり、想定する主な取組の例）

河床の汚濁物堆積への対応



写真 浚渫（堆積している汚濁物の除去）

出典 東京都建設局「令和5年版 事業概要」：
(<https://www.kensetsu.metro.tokyo.lg.jp/content/000065482.pdf>)



写真 河床整正
（堆積しにくい河床形状に整正）

出典 目黒区「目黒川における水質浄化対策の進め方」
(<https://www.city.meguro.tokyo.jp/midori/shigoto/kasen/suishitsu.html>)

無酸素状態の改善への対応



写真 無酸素状態の底層水への酸素供給

出典 大田区「令和4年度呑川水質浄化対策研究会報告書」
(https://www.city.ota.tokyo.jp/gikai/kugikai_katsudou/iinkai/iinkaishiryo/machidukuri/R5machidukuri/machisukuri0526.files/07_machi050526.pdf)

雨天時の河川への汚濁物等の流入を削減

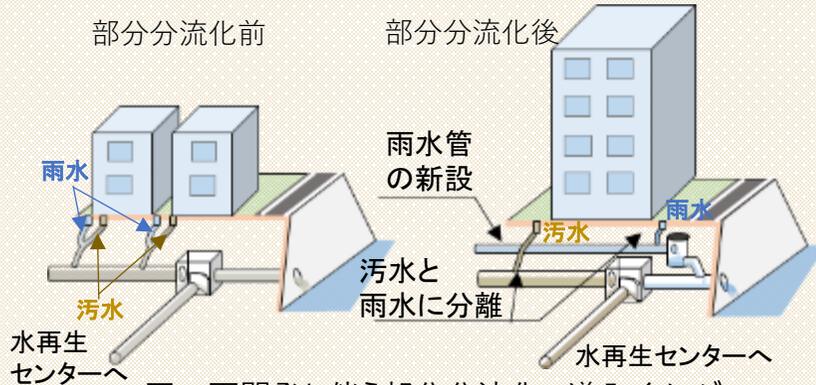


図 再開発に伴う部分分流化の導入イメージ

※市街地開発等の開発行為に合わせて、新たにもう一本の下水道管の整備が可能な場合に、事業者の協力が得られれば、開発区域内の建物の排水管を汚水と雨水に分ける部分分流化を実施



写真 貯留施設の設置

その他（導水など）



写真 水質浄化された外濠からの導水

②人々が快適に過ごし、生物の生息環境となるみどりをまもり、育てる

- 日本橋川周辺の公共空間や民地などの緑地をまもり、育て、周辺の緑地と川沿いの緑をつなぐ。
- 生物多様性の観点も踏まえ、今ある水生生物等の生息環境をまもり、広げる。
- 生物観察や環境学習を楽しむことができる空間や機会をつくる。

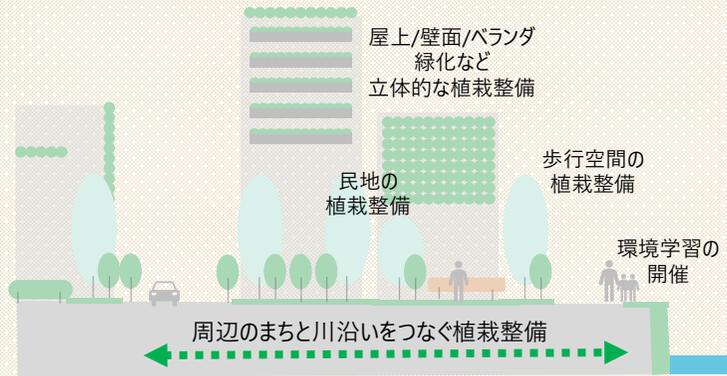


図 みどりの形成のイメージ



写真 生物観測、環境学習のイメージ



図 自然環境改善のイメージ

【コラム】日本橋川の上流の外濠における水質浄化の取組

- ◆ 日本橋川の上流に位置する外濠の水辺空間は、夏季を中心にアオコの大量発生に伴う景観障害や異臭といった都市環境の悪化により、まちに安らぎや潤いを与える機能を十分に発揮できておらず、都市の魅力が低下している状況にあり、外濠周辺だけではなく、下流の日本橋川等への水質にも影響を及ぼしている。
- ◆ 都は、歴史的財産である外濠の水質改善を進め、都心で働く人々に癒しの場を提供するとともに、品格ある景観を形成し、魅力あるまちづくりへつなげていくため、令和4年度に「外濠浄化に向けた基本計画」を策定した。
- ◆ 外濠は、流入水が少なく、水が滞留しやすい「閉鎖性水域」という特性を有しており、①濠水の水温が25℃を超え、②窒素・リンが豊富な水質状況となり、③濠水の滞留時間が5日を超えると、アオコが大量発生するおそれがある。
- ◆ 恒久的な水質改善対策として、浄化用水を外濠へ0.5m³/s導水することで濠水の滞留を防止し、アオコの発生を抑制する計画であり、現在、2030年代半ばの導水に必要な施設整備に向けた取組を実施中である。



アオコ発生状況



外濠水辺再生



図 外濠への導水ルートのイメージ

【コラム】他都市における水質改善への取組

<大阪市の取組>

- ◆ 道頓堀川・東横堀川では、夏季における貧酸素化（溶存酸素量の低下）が問題となっていた。特に、降雨時に下水が河川に流入し、水質汚濁の原因となっていた。
- ◆ これらの問題に対処するため、総合的な対策が実施されている。
 - ① 超高度処理（MBR）の導入：膜で汚れや細菌を除去し、透明度が高く大腸菌ゼロの超高度処理水を東横堀川に放流
 - ② 貯留施設の設置：雨水吐き口から未処理下水を放流させないことを目標に、大規模貯留管（14万m³）を建設
 - ③ 水門操作による流入水質改善：潮の干満を利用した水門操作により比較的清い大川の水を取り込み、水の流動化を促進
- ◆ 貯留施設の設置により、貯留管供用前は、降雨後1～2日間の糞便性大腸菌群数が高かったが、供用後は降雨後の増加抑制が確認されている。



道頓堀川水門



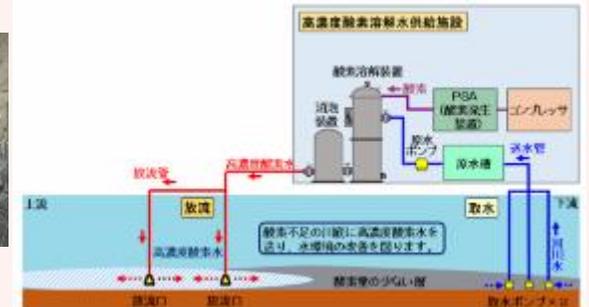
東横堀川水門



②貯留施設の設置

<目黒川（東京都目黒区）の取組>

- ◆ 目黒川では、以前より、悪臭や水面の白濁化、スカムが発生するなどの問題が生じていた。
- ◆ これらの問題に対処するため、総合的な対策が実施されている。
 - ① 高濃度酸素溶解水供給施設の整備：高濃度の酸素を川底に供給することで、貧酸素状態を改善し、硫化水素の発生を抑制
 - ② 河床の整正及び浚渫：泥やヘドロを除去し、河床を平坦にすることで、水質の改善
 - ③ 貯留施設の設置：降雨初期の汚れた雨水を一時的に貯留する施設（貯留管）の整備
- ◆ 対策実施により、年間の悪臭発生日数が減少傾向が見られている。



①高濃度酸素溶解水供給施設の整備



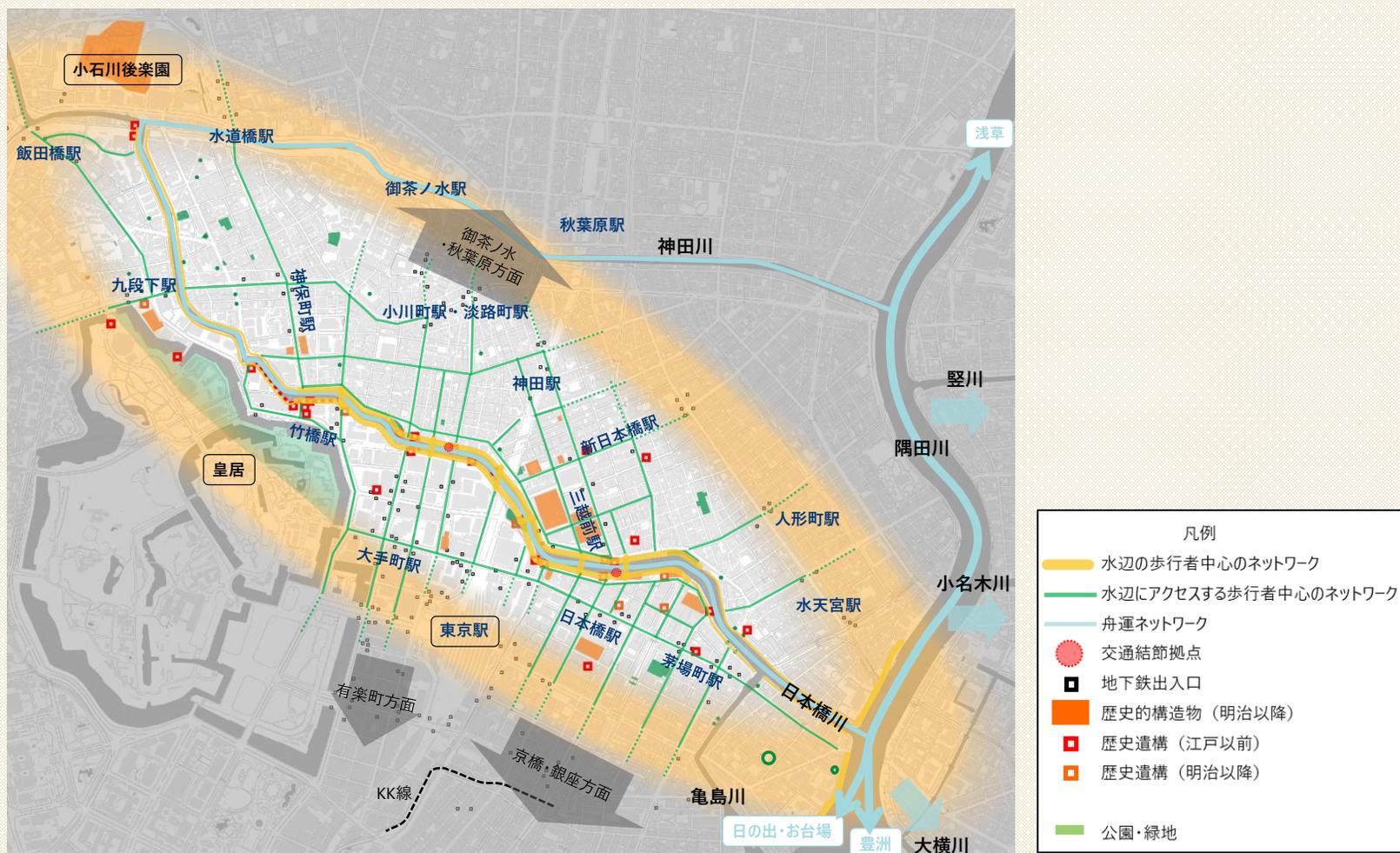
②河床の整正及び浚渫



③貯留施設の設置

水を感じながら川沿いを歩ける連続的な歩行者空間と、川に向かう歩行者空間を、公共空間と民地が一体となってユニバーサルデザインに配慮し、整備する。周辺の歩行者空間、特徴あるエリアや歴史資源・文化と日本橋川沿いをつなぐことで、川を中心に周辺のまちを面的につないでいく。

さらに、船着場とその周辺に交通結節拠点（モビリティハブ）を整備し、これら拠点をつなぐ舟運航路を形成することで、水陸のマルチモードな交通ネットワークを形成する。



① 歩いて楽しい水辺をつくる、つなぐ

- 様々な高さを連続的に歩ける親水空間をつくる。先行整備区間（5章参照）では、川の兩岸に親水空間をつくる。
- 建築物は川沿いにゆとりのある配置とし、低層階ににぎわい施設を導入することで、歩きたくなる水辺の歩行者空間をつくる。
- 川の兩岸をつなぐ歩行者用橋梁を配置するなど、対岸との回遊性を高める歩行者ネットワークを充実させウォークブルな水辺をつくる。
- 日本橋川沿いの道路において、道路空間の再編（リメイク）などにより連続的に歩ける水辺の歩行者空間をつくる。

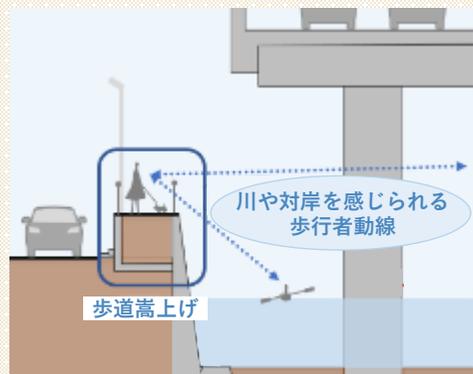


図 道路空間再編のイメージ

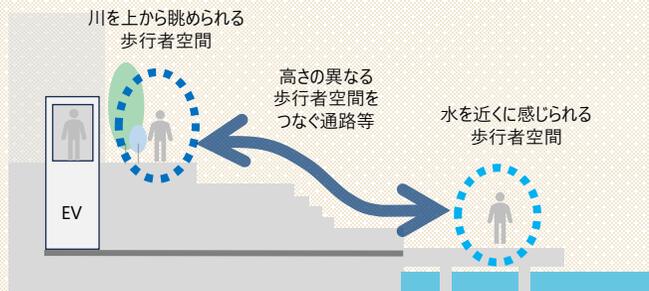


図 高さの異なる歩行者空間をつなぐイメージ



図 水辺の歩行者ネットワークのイメージ

② 鉄道駅や周辺地域と水辺をつなぐウォカブルなまちをつくる

- 民間敷地内に地下鉄駅からの縦動線や通路を整備するなど、民地、道路、河川等が連携し、**周辺エリアとの回遊性を高める、歩行者ネットワーク**をつくる。
- 開発等の機会を捉えて、道路空間の再編（リメイク）や時間帯で利活用の形態を変更することなどにより、川へのアクセス性を向上させ、ウォカブルなまちをつくる。
- 日本橋川周辺の**歴史資源・文化**を身近に感じられるよう、**サインや案内板等の設置**、先端技術等を活用して歴史・文化を体験できる環境を整え、回遊性を高める。

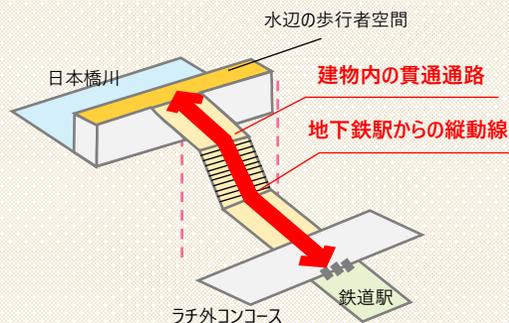


図 縦動線と貫通通路のイメージ



図 道路空間再編のイメージ



図 周辺地域と水辺のネットワーク化のイメージ

③都市を回遊する航路、水陸をつなぐ交通結節拠点の整備

- 連続した河川との回遊性も視野に入れ、**新たな舟運航路を形成する**（観光・通勤）。
- 水陸をつなぐマルチモードな交通結節拠点（モビリティハブ（船着場の案内や待合機能を含む。））を、歩行者動線の交差点部に整備する。

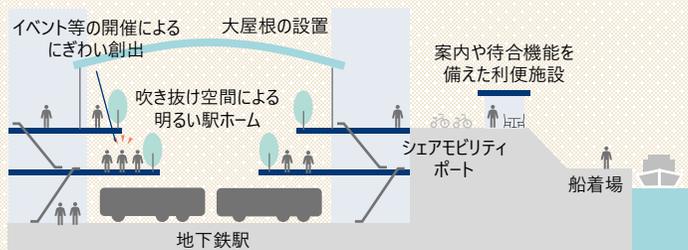


図 水陸の交通結節拠点のイメージ



図 交通結節拠点のイメージ



図 水陸のマルチモードなネットワークのイメージ

都心で川を間近に感じられ、江戸からの歴史資源・文化を抱える日本橋川の水辺空間の持つポテンシャルを最大限にいかすことに取り組む。

川と川へアクセスする主要動線の交差点を中心に、日常・非日常を問わず大人も子どもも問わず、訪れたい魅力あるにぎわい空間・憩い空間を整備する。

また、川を中心とした水の都・東京の新しい景観を、公共空間（河川・道路等）と民地で連携して創出する。



- 凡例
- 水辺及び水辺にアクセスする歩行者中心のネットワーク
 - 人が集う拠点
 - 交通結節拠点
 - 周辺の緑
 - 周辺の歴史資源・文化
 - 周辺のまち

①川を近くに感じられるにぎわい空間・憩い空間の整備

- 橋詰広場の利活用を中心に、にぎわいを生み出す、人々が集う拠点を整備する。
- 民地と道路、河川等が連携し、川を眺めて一息つける憩いの空間やにぎわいの空間を整備する。
- 人々の目的地となるにぎわいを創出するため、水辺空間の個性をいかし、川を近くに感じる親水空間を整備する。
- 将来の気候変動による海面上昇等を踏まえた高潮対策として、水門を整備し、まちと一体的な治水対策を実施する。

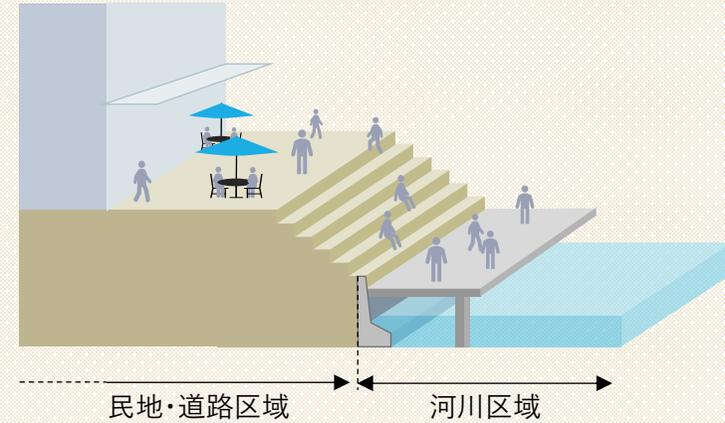


図 管理主体が異なる空間の連携のイメージ

表 親水空間創出に向けた整備メニュー例

	親水護岸	親水デッキ	張出テラス
護岸断面イメージ			
特徴	<ul style="list-style-type: none"> • 背後地と連続的に親水性を確保可能 • 道路・民地を含めて護岸を整備し親水性を確保可能 	<ul style="list-style-type: none"> • 河川に沿った連続的な親水空間を確保可能 	<ul style="list-style-type: none"> • 河川側等に制約がある場合でも親水性を確保可能

▲沿川開発の機会を捉えて整備する場合の基本形

① 川を近くに感じられるにぎわい空間・憩い空間の整備



図 橋詰広場を中心とした拠点のイメージ

① 川を近くに感じられるにぎわい空間・憩い空間の整備

江戸東京文化

きれいに

つなぐ

集う

うみだす



図 水辺の憩い空間のイメージ



図 水辺のにぎわい空間のイメージ

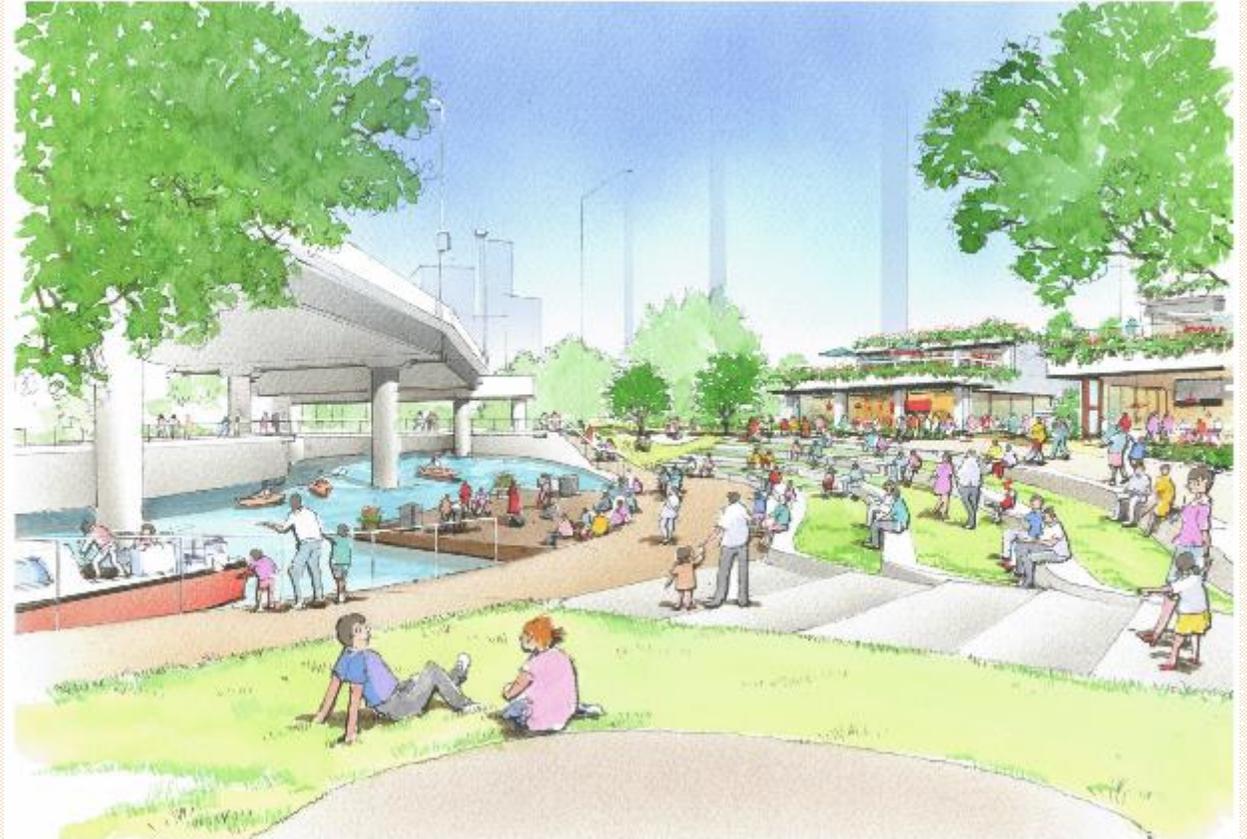


図 様々な高さの憩いの空間のイメージ

②川を中心とした東京の新しい景観をつくる

- 川に顔を向けた建築物の誘導により水辺空間ににぎわいのある景観をつくる。
- 景観軸である日本橋川を中心に、周囲も含めてバランス及びデザイン性のとれた統一感のある景観を形成していく。
- 公共施設等（護岸、親水空間、橋梁、道路等）のしつらえについて、地域ごとの特性を踏まえ、日本橋川沿いの個性ある景観をつくる。
- 首都高の修景やライトアップ等により、日本橋川の個性ある夜間景観や高架橋をいかした都市ならではのダイナミックな景観をつくる。



図 川に顔を向けた建築物のイメージ



図 高架橋等のライトアップのイメージ

②川を中心とした東京の新しい景観をつくる

江戸東京文化

きれいに

つなぐ

集う

うみだす

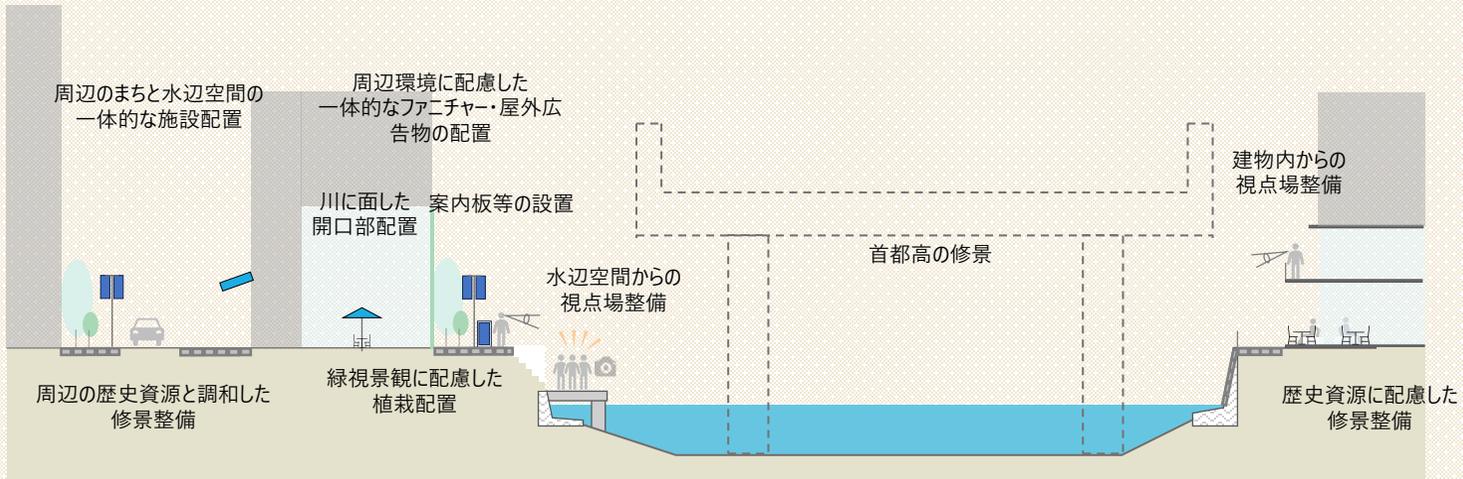


図 川を中心とした東京の新しい景観のイメージ

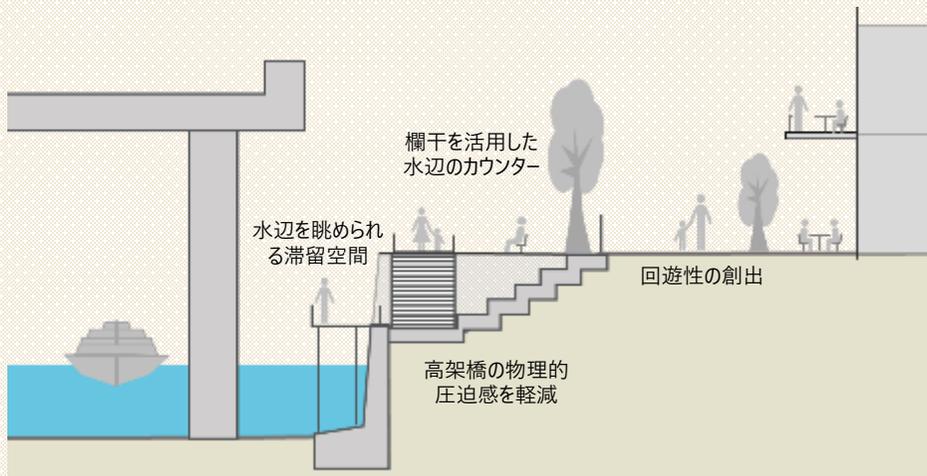


図 首都高高架橋が残る区間の親水空間整備の考え方



写真 首都高高架橋修景の事例 (首都高渋谷線)

②川を中心とした東京の新しい景観をつくる

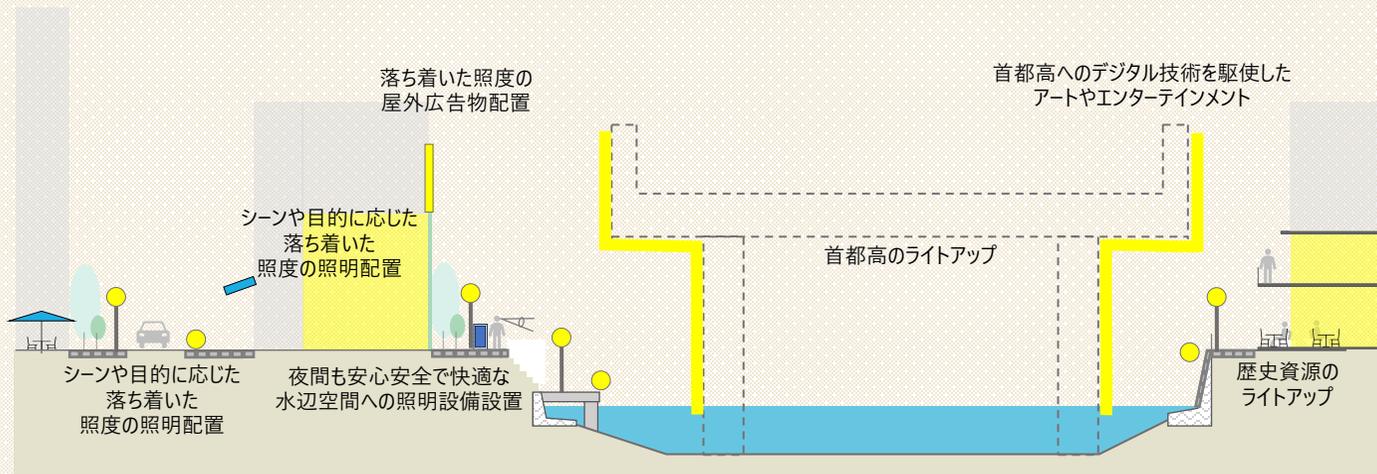
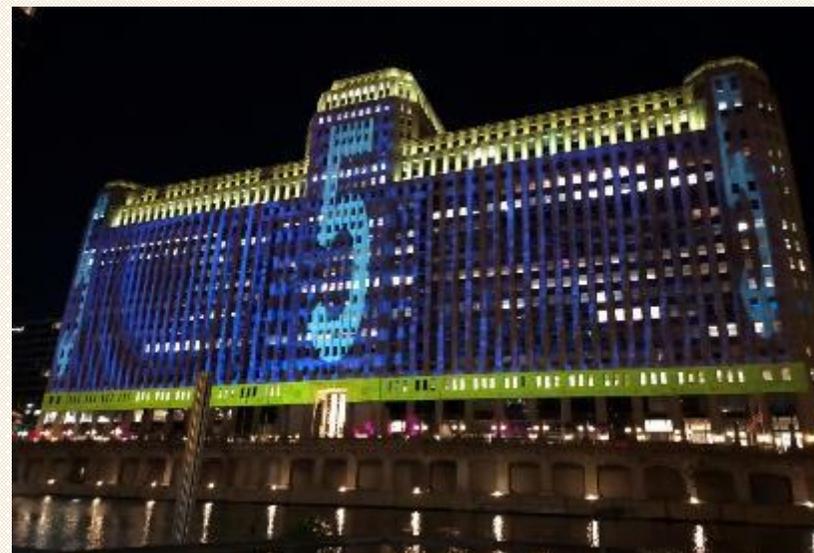


図 川を中心とした東京の新しい夜間景観のイメージ

写真 デジタル技術を駆使したアートやエンターテインメントの事例
(石垣市サザンゲートブリッジ)

出典 石垣島サザンゲートブリッジ：八重山日報社 2019年4月13日付

写真 デジタル技術を駆使したアートやエンターテインメントの事例
(シカゴリバーウォーク)

③江戸からの歴史資源・文化をいかす

- 情報発信やライトアップ等により、歴史・文化を引き立てる歴史的建造物等をいかす。
- 護岸の修景は、既設の石積や周辺の景観と調和させる。
- 晴れ舞台となる水辺空間を整備し、江戸由来の祭礼行事や地域のイベント等にいかす。
- 歴史的建造物等への案内板の設置等により歴史資源・文化の集積の魅力をいかす。



写真 地域の祭礼行事のイメージ

写真 歴史的建造物（三井本館）の
ライトアップの様子

写真 復元された常盤橋の様子

江戸時代より多様な主体が新しい価値を生み出し続けてきた日本橋川の文化を継承し、訪れる人を含め官民様々な関係者が連携して未来のにぎわいある水辺を生み出していく。

水辺の公共空間と民地の一体的なにぎわいづくりに取り組むとともに、にぎわいづくりの担い手となる官民連携組織の立上げなど、持続可能なにぎわいづくりを可能とする仕組みについて継続的に検討する。また、水面や水辺空間を実証実験の場とするなど次世代技術の活用を図るとともに、ゆとりと潤いのある環境から新しいビジネスの創出につなげていく。

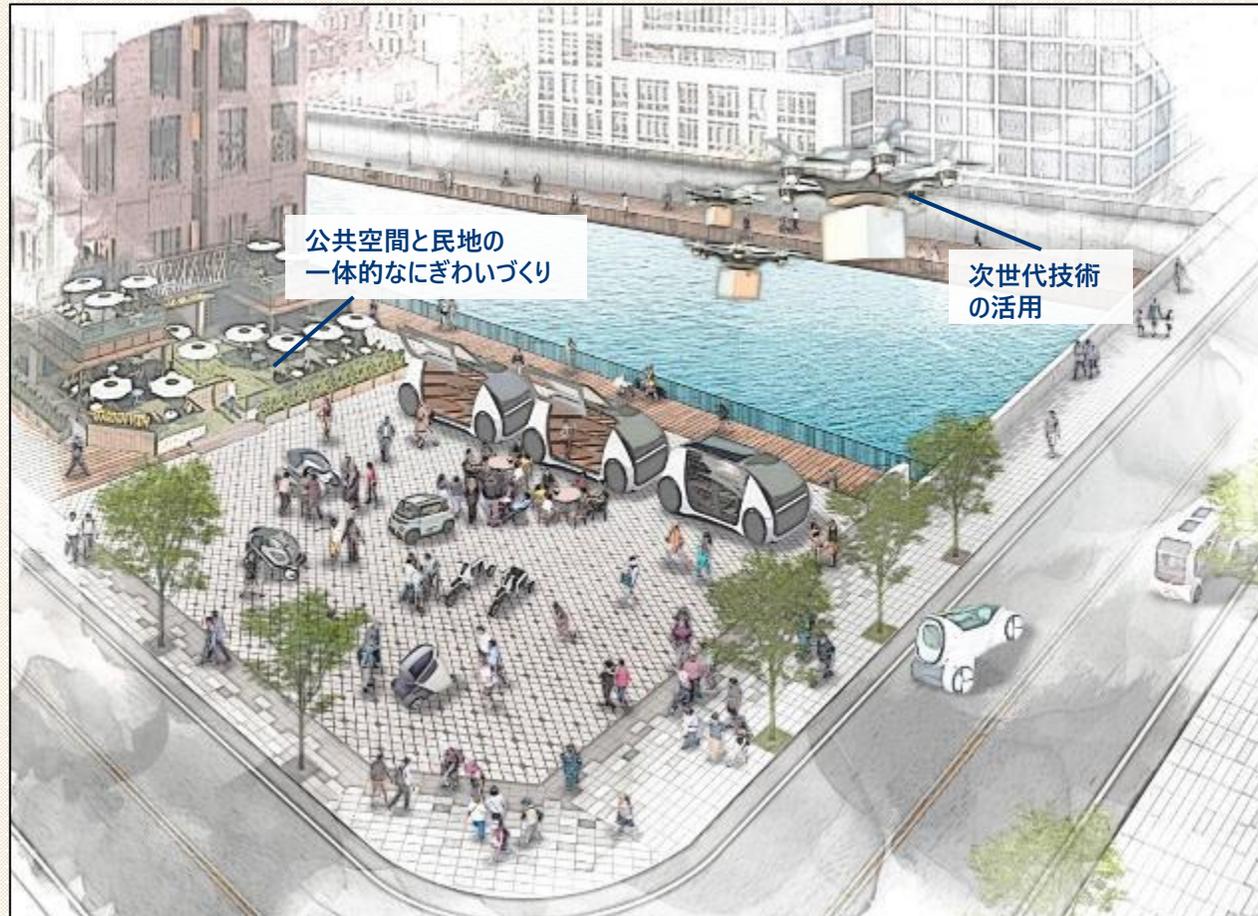


図 官民で連携した水辺空間の活用のイメージ

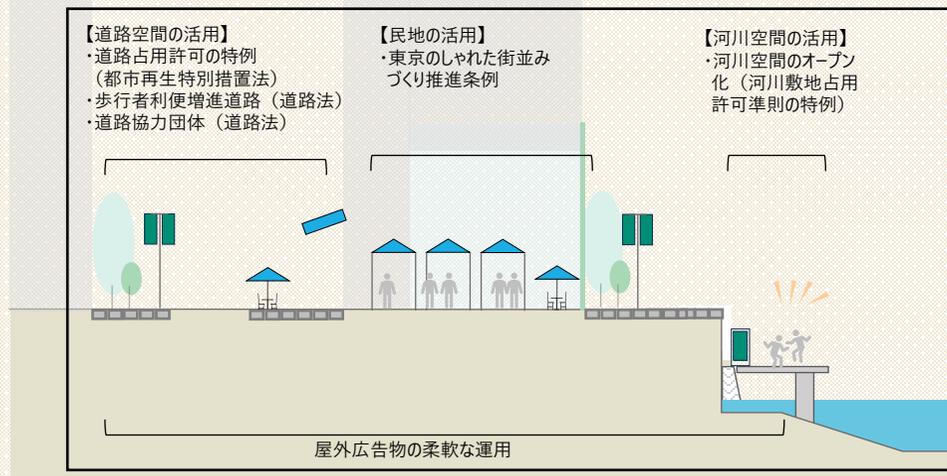
①沿川のにぎわい創出・魅力発信

- ・ エリアマネジメントの活動等をいかし、日本橋川及びその沿川のにぎわいづくりや水辺環境の向上、魅力発信を訪れる人を含め官民で連携して取り組む。（イベント、デジタル技術を駆使したアートやエンターテインメント等）
- ・ 高架がある区間については、屋根があることによる全天候型で夏場でも涼しい環境をいかした、新しい考え方を取り入れた水面や水辺の活用を行っていく。高架がない区間については開放感をいかした水面や水辺の活用を行っていく（アクティビティ等）。
- ・ ゆとりと潤いのある高質な水辺環境をつくり、日本橋川周辺の様々な企業や店舗、そこを訪れる人々による**新しいビジネスの創出**につなげていく。

②次世代技術の積極的な活用

- ・ 開発と合わせて生まれる水辺空間を次世代技術等も活用しながらにぎわいを創出する。
- ・ 川の水面や水辺空間を**次世代技術等の実証実験の場**として活用する。
- ・ AR等を活用した歴史・文化体験ができる環境を整える。

各種制度の活用（例）



持続可能な活動のための仕組みづくり

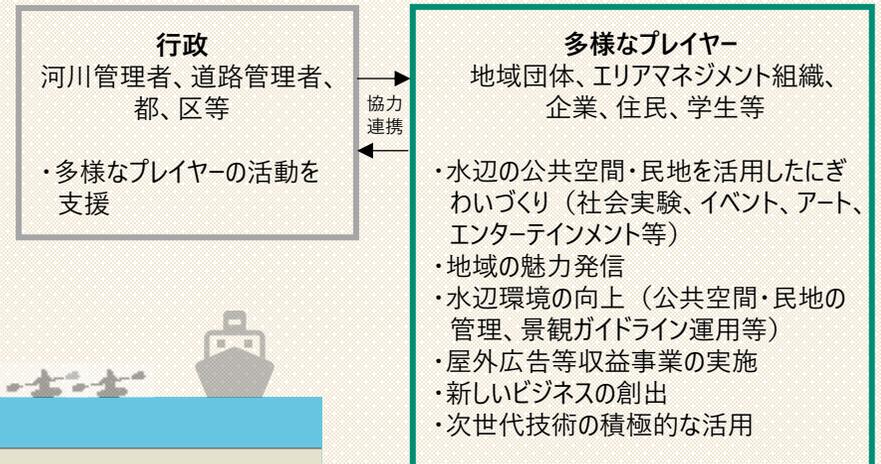
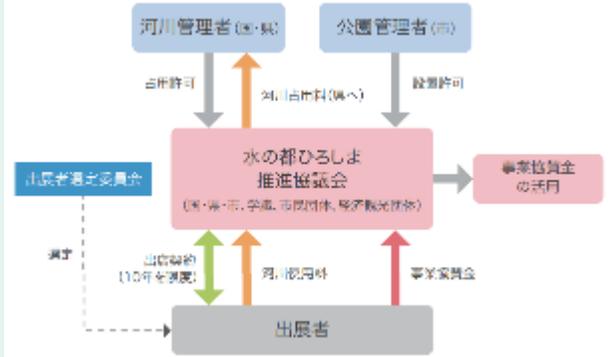


図 官民で連携した水辺空間の活用のイメージ

③持続可能な活動のための仕組みづくり

- にぎわい創出のための活動や維持管理・水質改善等の担い手となる**官民連携の仕組み**を検討する。
- 官民で協力し、各種制度を活用しながら、**多様な主体が公共空間で収益事業を含む多彩な活動ができる環境をつくる。**

表 検討に当たって参考にする事例

	かわまちづくり	都市再生推進法人
制度	<ul style="list-style-type: none"> • 推進主体と河川管理者が、かわまちづくり計画を共同で作成し登録すると、河川管理施設等整備への社会資本整備総合交付金の活用や、河川敷地占用許可準則の都市・地域再生等利用区域の指定等が円滑になる。 	<ul style="list-style-type: none"> • 都市再生特別措置法に基づき、地域のまちづくりを担う法人として、市町村が指定するもの • 都市再生推進法人が公共空間を活用した広告事業やカフェ事業を行い、収益を公共空間の管理に充当する事例が全国に存在する。
事例	<p>• 広島県広島市では、かわまちづくり計画の推進主体「水の都ひろしま推進協議会」に多様な主体が参画し、オープンカフェ等の事業者から使用料を収集し、環境整備に還元</p>  	<p>• 北海道札幌市では、都市再生推進法人「札幌駅前通まちづくり株式会社」が公共空間の貸出事業や広告事業の収益をまちづくりに還元</p>  <p>札幌市</p> <p>官民協働による新たな賑わいやにぎわいの創出により、都市のまちづくりがより一層進展することを期待！</p>
	<p>出典：国土交通省「かわまち大賞2018 水辺のオープンカフェ 天満川・旧太田川(本川)・元安川地区及び京橋川・猿猴川地区かわまちづくり」https://www.mlit.go.jp/river/kankyo/main/kankyou/machizukuri/taisyo/04-18taisyo02.pdf</p>	<p>出典：国土交通省都市局まちづくり推進課「都市再生推進法人制度について」https://www.mlit.go.jp/toshi/common/001039904.pdf</p>

【コラム】新技術を活用した新たな緑地空間の創出

- ◆ モバイルグリーン※は、従来は緑化が難しかった場所（駅前広場、駐車場、空き地、道路、地下通路など）を暫定的・可変的な緑地として活用する上での鍵となる新技術である。狭小敷地や日照不足といった条件不利地でも緑化が可能であり、様々な都市空間への適用が期待される。
- ◆ さらに、モバイルグリーンを自律・自走型ユニットと組み合わせれば、日照や風、気温などの物理環境の変化に応じて、緑の配置を自動で調整でき、可変性のある緑地の形成が可能となる。加えて、植物の更新も容易であるため、持続的な緑の維持管理にも貢献することが期待される。
- ◆ 水域への展開も可能であり、中央区佃の石川島公園船溜まりでは、2010年（平成22年）と2011年（平成23年）に異なる浮力材料を用いた植生浮島を3基ずつ設置し、継続的な調査が行われた。その結果、汽水域において19種類の在来種による長期的な緑化を実現し、カルガモの産卵や昆虫の生息なども確認されていることから、河川内での設置により、修景のみならず水質浄化や生物多様性の保全も期待される。

※東京大学と住友林業（株）との共同開発

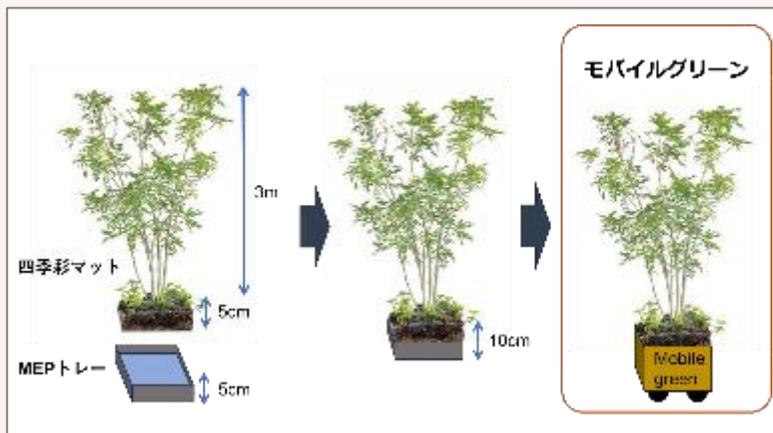


図 モバイルグリーンの概要



写真 モバイルグリーンを用いた社会実験風景
(Ginza Sky Walkイベント)



写真 植生浮島の実証実験
(写真提供：清水建設（株）)



図 モバイルグリーンによる駐車場の暫定緑化
(シミュレーションによる想定図)

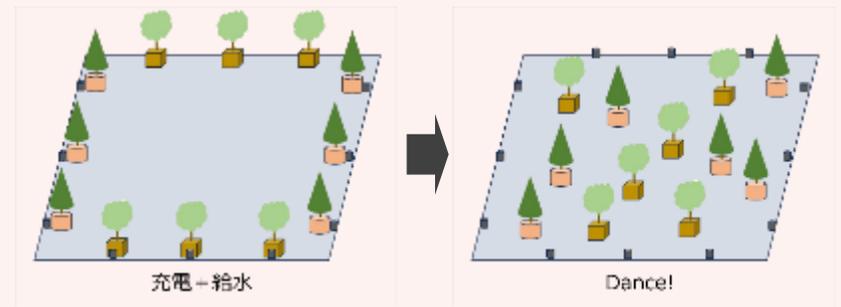
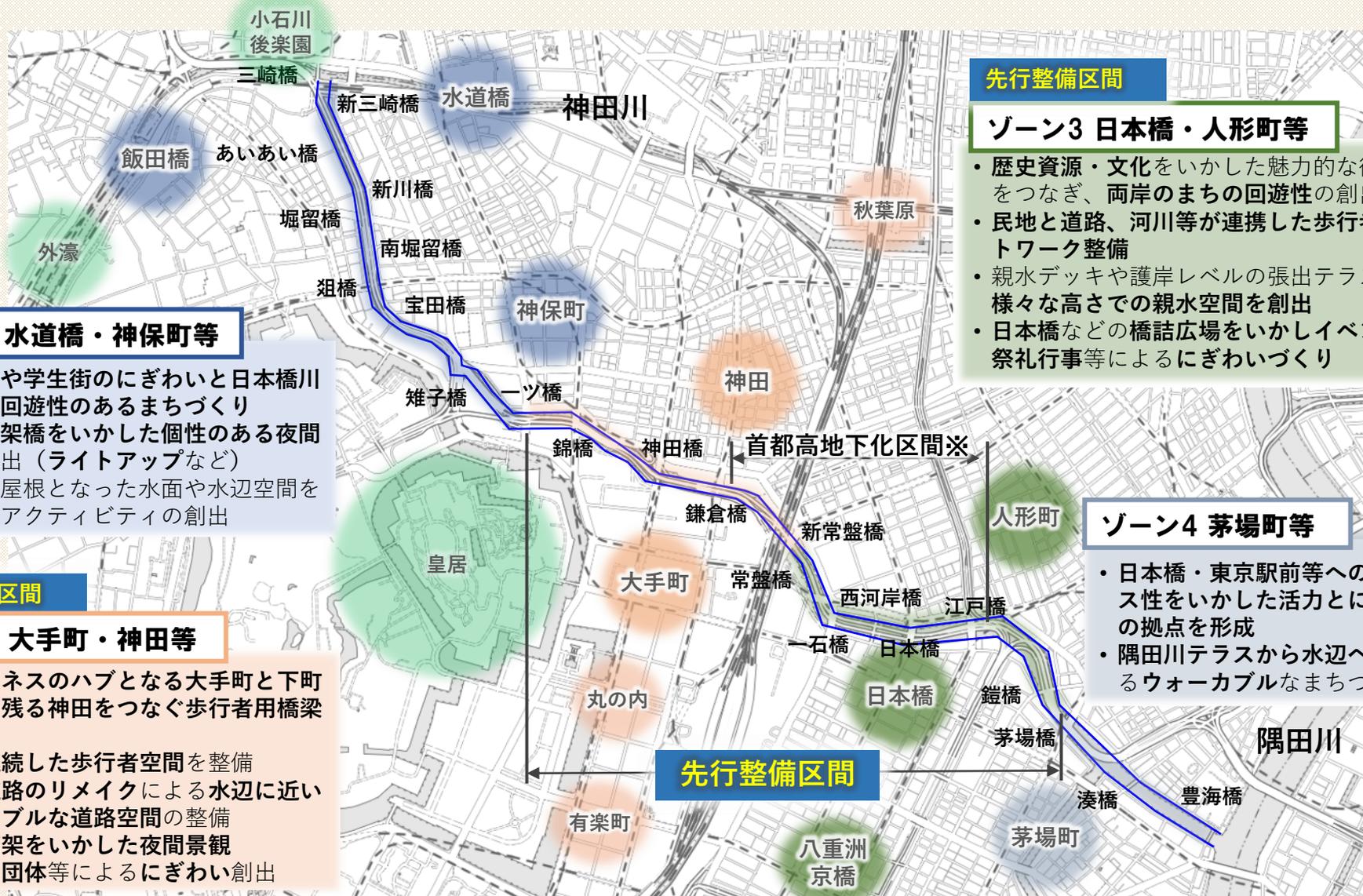


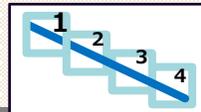
図 自律・自走型モバイルグリーンの活用イメージ

5 ゾーン別の主な取組

5 (1) 水辺空間再生にあたってのまちづくりのゾーニング

周辺地域の特性をふまえ、四つにゾーニングし、五つのコンセプト（江戸東京文化・きれいに・つなぐ・集う・うみだす）に基づき各ゾーンでインフラ整備やまちづくりに関する取組を具体化、推進していく。





まちづくりの主な取組

- ◇川に顔を向けた建築物の誘導により、水辺空間ににぎわいのある景観をつくる。
- ◇景観軸である日本橋川を中心に、周囲も含めてバランス及びデザイン性のとれた統一感のある景観を形成していく。
- ◇公共施設等（護岸、親水空間、橋梁、道路等）のしつらえについて、ゾーンごとの特性を踏まえ、日本橋川沿いの個性ある景観をつくる。
- ◇情報発信やライトアップ等により、歴史資源・文化を引き立てる歴史的建造物等をいかす。
- ◇歴史的建造物等への案内板の設置等により歴史資源・文化の集積の魅力をいかす。
- ◇ゆとりと潤いのある高質な水辺環境をつくり、沿川の様々な企業や店舗、そこを訪れる人々による新しいビジネスの創出につなげていく。
- ◇開発と合わせて生まれる水辺空間を次世代技術等も活用しながらにぎわいを創出する。
- ◇川の水面や水辺空間を次世代技術等の実証実験の場として活用する。
- ◇AR等を活用した歴史・文化体験ができる環境を整える。
- ◇にぎわい創出のための活動や維持管理・水質改善等の担い手となる官民連携の仕組みを検討する。
- ◇官民で協力し、各種制度を活用しながら、多様な主体が公共空間で収益事業を含む多彩な活動ができる環境をつくる。

インフラ整備と活用の取組

- ◇河川
 - 様々な対策により官民連携して水質を改善する。
 - 川沿いの公共空間や民地などの緑地をまもり、育て、周辺の緑地と日本橋川の緑をつなぐ。
 - 生物多様性の観点も踏まえ、今ある生息環境をまもり、広げる。
 - 生物観察や環境学習を楽しむことができる空間や機会をつくる。
 - 将来の気候変動による海面上昇等を踏まえた高潮対策として、水門を整備し、まちと一体的な治水対策を実施する。
- ◇歩行者NW
 - 建物の顔を川に向け、川沿いにゆとりのある配置とするなど、川が近くに見えて歩きたくなる水辺の歩行者空間をつくる。
 - 道路空間の再編（リメイク）や時間帯で利用（活用）形態を変更することなどにより、川へのアクセス性を向上させ、ウォーカブルなまちをつくる。

ゾーンの特性

- 江戸時代は武家地。その後、武家跡地に大学が立地、多様な教育施設が集積
- 商業、エンターテインメント施設、教育施設、歴史資源と居住などが集積する緑豊かな地域
- 学生のまちとして古書店が立地
- 川幅は25～35m程度。将来も首都高の高架橋は存在

まちづくりの主な取組

- ◇古書店街や学生街のにぎわいなど様々な機能が調和しながら集積し、活力とにぎわいの拠点を創出
- ◇交通結節機能の強化などにより、まちと日本橋川との回遊性を創出
- ◇地域のイベントやエリアマネジメント団体等の活動をいかした官民連携による水辺のにぎわいの創出

インフラ整備と活用の取組

- ◇首都高
 - ・首都高の修景やライトアップ等により、個性ある夜間景観や高架橋をいかしたダイナミックな景観を創出
 - ・デジタル技術を駆使したアートやエンターテインメント等によるにぎわいの創出
- ◇河川
 - ・河床に堆積している汚濁物への対応、雨天時の河川への汚濁物等の流入の削減、無酸素状態の改善などによる水質改善（外濠からの導水、浚渫、水質浄化施設の設置、貯留施設の設置、雨水浸透施設の設置、部分分流化など※） ※水質を改善するための具体的な取組内容について、水質モニタリング及び水質シミュレーションを継続し決定する。
 - ・周辺の景観と調和を図った護岸の修景
 - ・高架が屋根となった水面や水辺空間を活用したアクティビティの創出
 - ・将来の気候変動による海面上昇等を踏まえ、水門による高潮対策を実施
- ◇歩行者NW
 - ・親水空間の整備（張出テラスなど）
 - ・川を上から眺められる連続した水辺の歩行者空間の整備
 - ・道路空間の再編によるウォークブルな歩行者ネットワークの形成
- ◇舟運
 - ・神田川との回遊性も視野にいれた新規航路の検討（観光・通勤）



ゾーンの特性

- 江戸時代は武家地。江戸城の石積護岸が部分的に存在。江戸城の城門の一部が現存
- 右岸に国際金融の拠点機能、政府機関、情報通信・メディア機能などの大手企業が集積する大手町、左岸に業務、商業及び居住機能が集積し、表通りのみならず雰囲気のある路地空間のある神田が立地
- 川幅は30～40m程度。上流側は首都高の高架橋が将来も存置、下流側は地下化。両岸で複数の大規模な開発が進行中

まちづくりの主な取組

- ◇国際ビジネスのハブとなる大手町と下町らしさの残る神田をつなぎ、歴史資源・文化をいかした両岸のまちの回遊性の創出
- ◇江戸由来の祭礼行事やエリアマネジメント団体等の活動をいかした官民連携による水辺のにぎわいの創出
- ◇地域の特性を踏まえた一定のルールに沿った街路樹、舗装、サイン、ファニチャー・屋外広告物等の配置等

インフラ整備と活用の取組

- ◇首都高
 - ・首都高の修景やライトアップ等により、個性ある夜間景観や高架橋をいかしたダイナミックな景観を創出
 - ・デジタル技術を駆使したアートやエンターテインメント等によるにぎわいの創出
- ◇河川
 - ・河床に堆積している汚濁物への対応、雨天時の河川への汚濁物等の流入の削減、無酸素状態の改善などによる水質改善（浚渫、水質浄化施設の設置、貯留施設の設置、雨水浸透施設の設置、部分分流化、放流先変更など※）
※水質を改善するための具体的な取組内容について、水質モニタリング及び水質シミュレーションを継続し決定する。
 - ・江戸時代の石積護岸との調和を図った護岸の修景
 - ・高架が屋根となった水面や水辺空間を活用したアクティビティの創出
- ◇歩行者NW
 - ・親水空間の整備（親水護岸、親水デッキ、張出テラスなど）
 - ・川の両岸に連続した歩行者空間や、水を近く感じられる歩行者空間の整備
 - ・建築物は川沿いにゆとりのある配置とし、低層階ににぎわい施設を導入することで、歩きたくなる水辺の歩行者空間をつくる。
 - ・民地、道路、河川等が連携したにぎわい空間の整備
 - ・両岸のまちをつなぐ歩行者用橋梁の整備
 - ・沿川の道路をリメイクし、水辺に近いウォーカブルな道路空間の創出
- ◇舟運
 - ・新規航路の検討（観光・通勤）
 - ・交通結節拠点の整備



ゾーンの特性

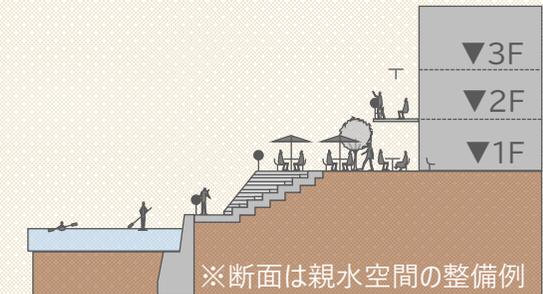
- 江戸時代より日本の交通・商業・文化の要地、日本銀行本店や三越本店、日本橋など重要文化財が数多く存在
- 日本橋を中心に百貨店や歴史ある飲食店、伝統工芸等が集積し、国内外から多くの人々が来訪
- シェアオフィスなどを活用した、ライフサイエンス分野や宇宙産業など、新たな産業拠点創出の機運が高まるエリア
- 川幅は45～65m程度。一部の高架橋を残し、全区間で首都高が地下化に合わせて、複数の大規模開発が進行中

まちづくりの主な取組

- ◇老舗や江戸文化をいかした美しく魅力的な景観を備えた**国際的な商業・観光エリアを形成**するとともに、**歴史的建造物などの保存・再生**や**建築物のリノベーション**などにより、**歴史や文化と調和し、風格とにぎわいのある魅力的な街並み**を形成
- ◇様々な歴史資源・文化をいかした魅力的な街並みをつなぎ、**両岸のまちの回遊性**の創出
- ◇**地域のイベントやエリアマネジメント団体**等の活動をいかした**官民連携**による水辺のにぎわいの創出

インフラ整備と活用の取組

- ◇首都高
 - ・ **首都高の修景やライトアップ**等により、個性ある**夜間景観**や高架橋をいかした**ダイナミックな景観**を創出 (江戸橋JCT)
- ◇河川
 - ・ 河床に**堆積している汚濁物への対応**、雨天時の河川への**汚濁物等の流入の削減**、**無酸素状態の改善**などによる**水質改善** (浚渫、水質浄化施設の設置、貯留施設の設置、雨水浸透施設の設置、部分分流化、放流先変更など※) ※水質を改善するための具体的な取組内容について、水質モニタリング及び水質シミュレーションを継続し決定する。
 - ・ **日本橋等文化財施設と調和を図った護岸の修景**
 - ・ **水面を活用したアクティビティの創出**
- ◇歩行者NW
 - ・ **親水空間の整備 (親水護岸、親水デッキ、張出テラスなど)**
 - ・ 建築物は川沿いにゆとりのある配置とし、**低層階**に**にぎわい施設**を導入することで、**歩きたくなる水辺の歩行者空間**を川の両岸につくる。
 - ・ **日本橋を中心に道路、橋詰広場、デッキ及び建物低層部**について、**歴史と文化を踏まえ、統一されたしつらえを整備するためのルールづくり**
 - ・ 日本橋などの**橋詰広場**をいかし、**イベント・祭礼行事**等による**にぎわいづくり**
 - ・ **デジタル技術**を駆使した**アートやエンターテインメント**等による**にぎわいの創出**
 - ・ **民地、道路、河川等が連携したにぎわい空間の整備**
 - ・ **両岸のまちをつなぐ歩行者用橋梁の整備**
 - ・ **民地、道路、河川等が連携して歩行者ネットワークを整備し、周辺エリアとの回遊性を向上**
- ◇舟運
 - ・ **新規航路の検討 (観光・通勤)** ・ **交通結節拠点の整備**



ゾーンの特性

- 江戸時代は水運の玄関口として発達
- 日本橋川だけではなく、親水空間が整備された隅田川や亀島川に隣接したゾーン
- 商業や生活利便施設、住宅などが立地
- 川幅は45～60m程度と広く、上流の一部区間を除き、川の上空に首都高の高架はない。

まちづくりの主な取組

- ◇公共・公益施設の再編、土地の高度利用、日本橋・東京駅前や大丸有地区等へのアクセス性をいかした、活力とにぎわいの拠点を形成
- ◇水運の玄関口だった歴史をいかし、隅田川テラスから水辺へつながるウォーカブルなまちづくり
- ◇川に顔を向けたまちづくり

インフラ整備と活用の取組

- ◇河川
 - 河床に堆積している汚濁物への対応、雨天時の河川への汚濁物等の流入の削減、無酸素状態の改善などによる水質改善（浚渫、水質浄化施設の設置、貯留施設の設置、雨水浸透施設の設置、部分分流化、放流先変更など※）※水質を改善するための具体的な取組内容について、水質モニタリング及び水質シミュレーションを継続し決定する。
 - 周辺の景観と調和を図った護岸の修景
 - 水面を活用したアクティビティの創出
 - 将来の気候変動による海面上昇等を踏まえ、水門による高潮対策を実施
- ◇歩行者NW
 - 最寄鉄道駅等から、歴史資源・文化を回遊して水辺へつながる歩行者ネットワークの形成
 - 歴史資源・文化の情報発信を行うサイン・案内板などの設置



護岸修景の例（亀島川）

ゾーン2・3 先行整備区間における取組のイメージ

- ◆ 「大手町・神田周辺」及び「日本橋周辺」から成る先行整備区間における取組のイメージでは、日本橋川を中心に回遊性を高める歩行者ネットワークの形成に、先行的に取り組む。
- ◆ 日本橋川の水辺においては、川沿いを連続的に歩くことができるよう、道路、河川及び民地が連携して歩行者ネットワークの形成に取り組む。
- ◆ 周辺のまちや鉄道駅、周辺の歴史資源を含めてエリア全体の回遊性が高まるよう、これらから水辺にアクセスする歩行者ネットワークの形成に取り組む。

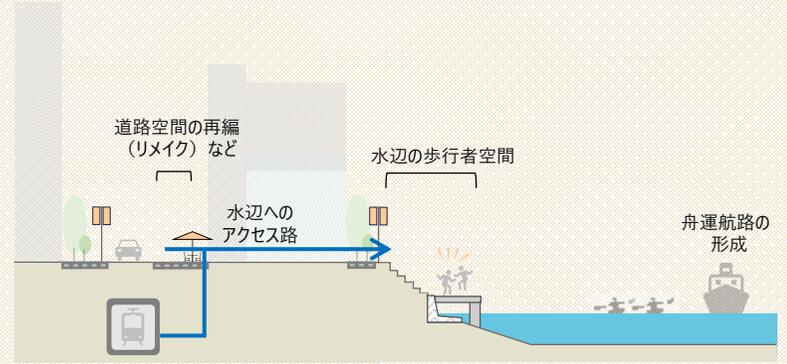
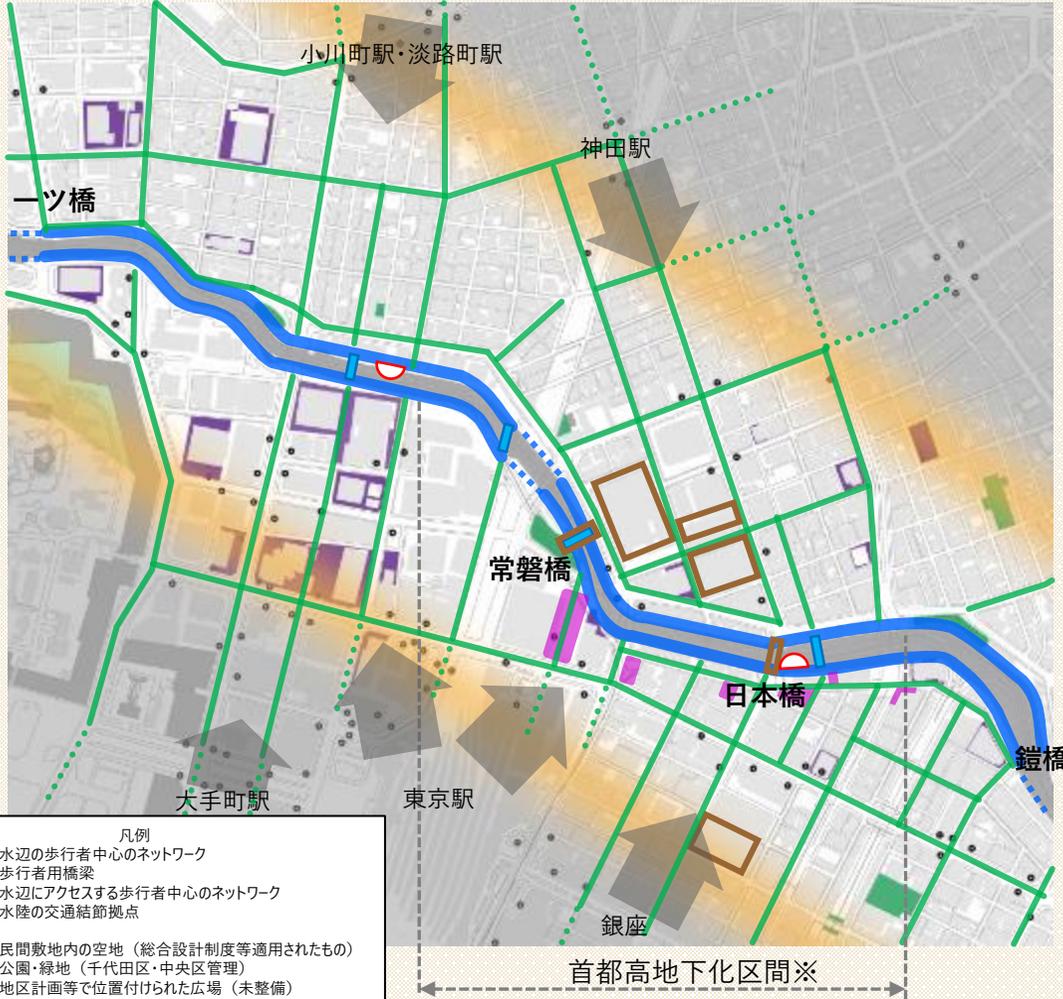


図 取組全体のイメージ



図 道路空間再編のイメージ

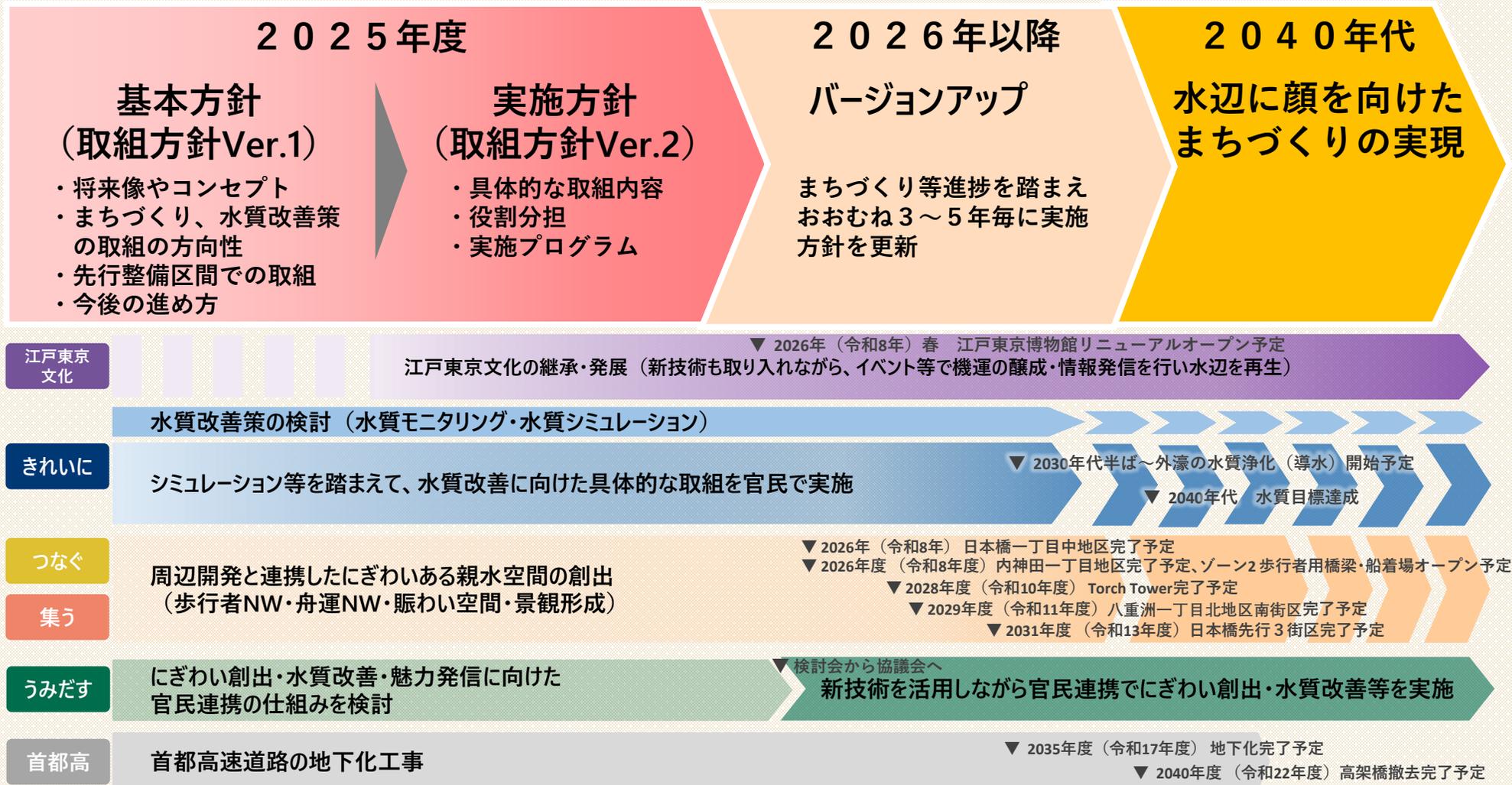
出典 地図：基盤地図情報（国土地理院）を加工して作成

※高架橋撤去は銚橋～鎌倉橋（予定）であるが、銚橋～江戸橋間の一部高架橋は残り、JR線～鎌倉橋の高速八重洲線スロープ部は河川内に残る。

6 ロードマップ（今後の進め方）



- ・「2050東京戦略」戦略19緑と水「豊かな緑と水が織りなす潤いと安らぎの都市東京」を実現する。
- ・本基本方針を踏まえ、具体的な取組内容等を取りまとめ、実施方針としてバージョンアップする。
- ・水質シミュレーションの精度向上による取組の一層の具体化やまちづくり等の進捗を踏まえ、おおむね3～5年ごとに更新していく。
- ・検討会を協議会に移行させ、取組の進捗状況等を共有する。
- ・にぎわい創出に向けた官民連携の仕組みを関係者とともに具現化するとともに、水質改善を含む日本橋川沿川の様々な取組と魅力等情報を発信していく。



参考資料

参考1 日本橋川周辺の歴史

- (1) 江戸時代：川と街道を活用したまちの発展
- (2) 明治以降：社会情勢の変化に伴うまちと川の変化

参考2 日本橋川周辺の地域特性

- (1) 交通インフラ
- (2) 昼間人口・夜間人口
- (3) 土地利用と来訪者の特性



参考 1 日本橋川周辺の歴史

(1) 江戸時代：川と街道を活用したまちの発展

街道と水路網の整備に始まる江戸のまちづくり

- ◆ 徳川家康は、日本橋を起点として江戸と全国を結ぶ街道を整備し、全国の大名家臣を江戸に集めた。
- ◆ 街道に加え、日本橋川を始めとした江戸の水路網も整備し、舟運で運搬した資材を用いて江戸城や江戸のまちの整備を進めた。

交通網をいかした江戸の商業・文化の発展

- ◆ 江戸の活性化のため、徳川家康は日本橋周辺に町地を設け、旧領地や伊勢・近江・大坂等から商人・職人を招き、街道沿いに呉服屋等が集積した。
- ◆ 日本橋周辺の川沿いには河岸を設け、魚河岸を始め舟運をいかした商業が発展した。
- ◆ 商業の集積と合わせて日本橋周辺には錦絵の版元・書物問屋や紙問屋、芝居小屋が立地し、江戸切子が発明されるなど、文化の発信地となった。
- ◆ 街路を多くの歩行者が行き交う様子が浮世絵等でも描かれている。



図 五街道と日本橋



図 江戸の水路網



図 多くの歩行者でにぎわう日本橋と魚河岸（左手前）



図 江戸後期の土地利用図

(凡例)

■	幕府用地
■	大名屋敷（上屋敷）
■	大名屋敷（中屋敷）
■	大名屋敷（下屋敷）
■	大名屋敷（その他）
■	幕府・大名以外の武家地
■	寺社地
■	町人地
■	河岸地

出典 国立国会図書館「東都名所 日本橋真景并二魚市全図」(<https://www.ndl.go.jp/landmarks/details/detail085.html>)
国土地理院所蔵「伊能大図（米国）彩色図」を加工
白杵市教育委員会所蔵「（江戸全図）」
岡本哲志「江戸→TOKYO なりたちの教科書：一冊でつかむ東京の都市形成史」（淡文社）を加工

(2) 明治以降：社会情勢の変化に伴うまちと川の変化

明治維新を受けたまちの近代化

- ◆ 明治維新後、大手町には官庁街が、日本橋周辺には銀行、郵便局及び百貨店が発達し、日本橋川周辺に近代化をけん引する施設が集積した。
- ◆ 日本橋周辺では近代化・西欧化の時代の変化に対応した商品が多く創出された。

関東大震災を契機とした社会資本の充実

- ◆ 日本橋川周辺は関東大震災で甚大な被害を受けたが、震災復興事業を通じて橋梁が整備されるとともに、土地区画整理が行われ広幅員道路が整備されるなど、現代につながる社会資本が整備された。
- ◆ 関東大震災に伴う魚河岸の築地への移転、鉄道の発展等により、徐々に日本橋川の舟運機能は衰退した。

戦後の首都高速道路高架設置と治水対策

- ◆ 江戸時代から継承された水路網は、戦後の瓦礫処理のために埋め立てられ、道路等に活用された。
- ◆ モータリゼーション及び東京オリンピック開催を契機として、日本橋川上空に首都高速道路高架が設置された。
- ◆ 名古屋地方を襲った伊勢湾台風と同じ規模の台風が発生した場合の高潮にも対応するため、川沿いには現代につながる防潮堤が整備された。

現代に続く日本橋川周辺への都市機能の集積

- ◆ 現代においては、大手町にはオフィス街が発達し、日本橋周辺には全国からの商業・商品を集めた百貨店や物産館、文化の発信拠点としての画廊・ギャラリーが立地するなど、日本橋川周辺に都市機能が集積している。



図 日本橋川周辺における震災復興事業

(1) 交通インフラ

交通インフラの高密度な立地により多くの人と車が通過

鉄道

- ◆ 日本橋川周辺に多くの駅が立地しており、駅の乗降客数は特に東京駅及び大手町駅で多い。
- ◆ 都心と開発が進む臨海部をつなぐ、都心部・臨海地域地下鉄の整備に向けた検討が進められている。

道路

- ◆ 外堀通り、中央通り、昭和通りなどの幹線道路が日本橋川を横断しており、幹線道路の1日当たり交通量は7千台～2.6万台程度である。
- ◆ 東京高速道路（KK線）は、首都高の新たな都心環状ルート of 整備により自動車専用道路としての役割が低下することから、歩行者中心の空間としての再生に向けた検討が進められている。



図 鉄道網・乗降客数
(一日平均乗降者数 (JR・メトロ2023年、都営2022年))

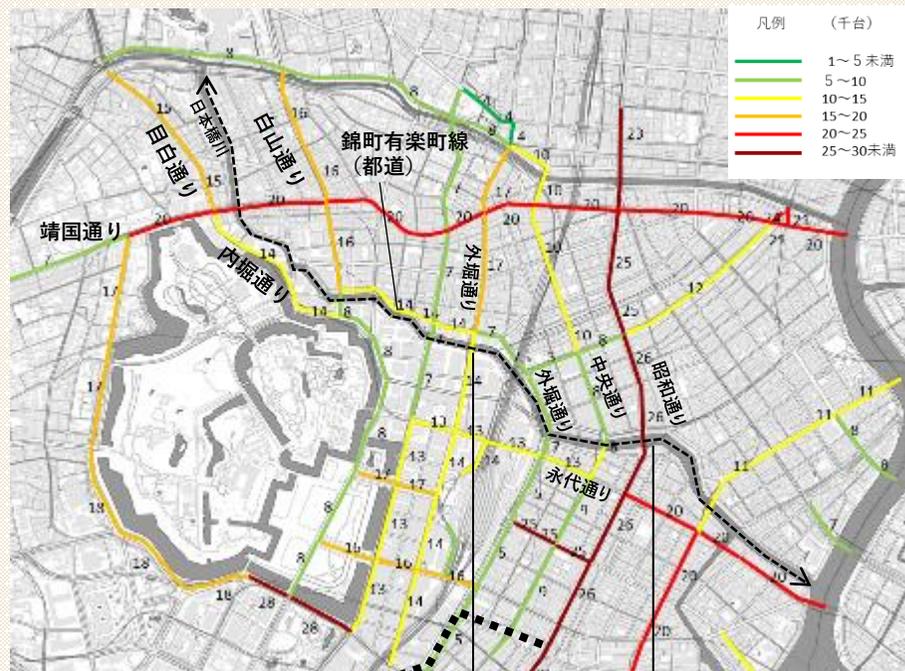


図 道路網・自動車交通量
(日交通量 (千台/日) (令和3年度道路交通センサス))

出典 地図：基盤地図情報 (国土地理院) を加工して作成

(2) 昼間人口・夜間人口

都内トップクラスの昼間人口が大手町・日本橋周辺に集積

- ◆ 日本橋川中流では、昼間と夜間で人口密度の差が大きく、上流と下流では差が小さい。
- ◆ 昼間人口密度が最も高い地区は、大手町1丁目、次いで日本橋2丁目である。また、一ツ橋～鎧橋周辺において昼間人口が非常に多い。
- ◆ 中流では、夜間人口が非常に少ない一方、内神田1丁目及び2丁目では比較的多い傾向がみられる。

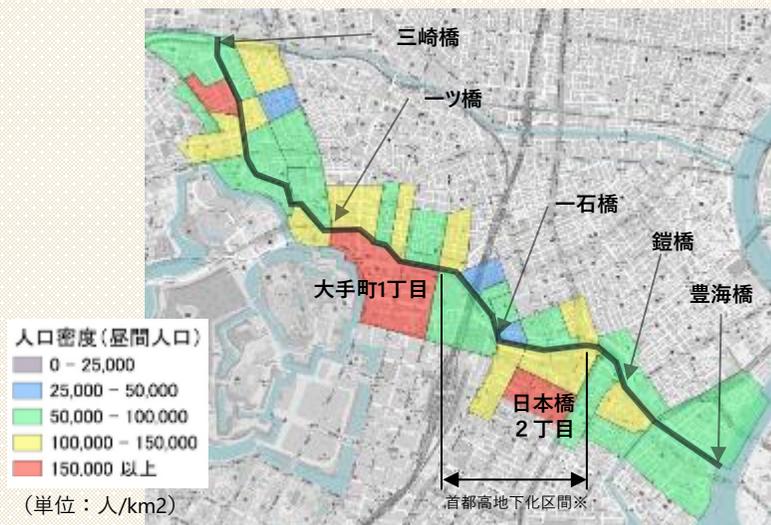


図 昼間人口密度 (町丁目別)



図 昼間人口密度 (ゾーン別)



図 夜間人口密度

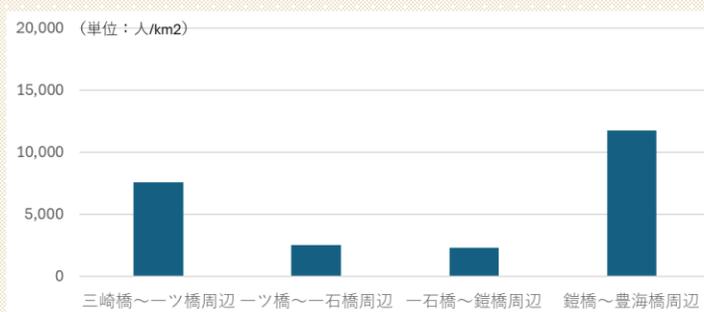


図 夜間人口密度 (ゾーン別)

出典 地図：基盤地図情報(国土地理院)を加工して作成

(3) 土地利用と来訪者の特性

沿川の多様な土地利用に対応した利用者像

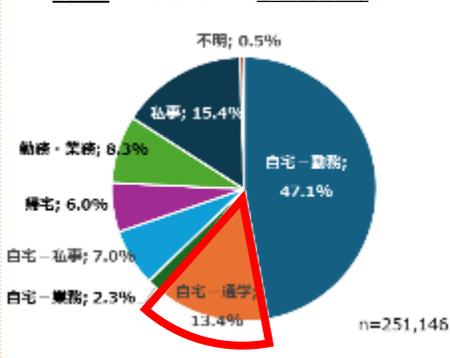
- ◆ 江戸時代に屋敷地・幕府用地だったエリアは、大規模オフィスや教育文化施設が多く、町地だったエリアは専用商業施設が多い傾向がみられる。
- ◆ 日本橋川周辺の多様な土地利用に対応した様々な目的を持った利用者（会社員、買い物客、学生、住民等）が川沿いを利用している。



図 日本橋川沿いの土地利用

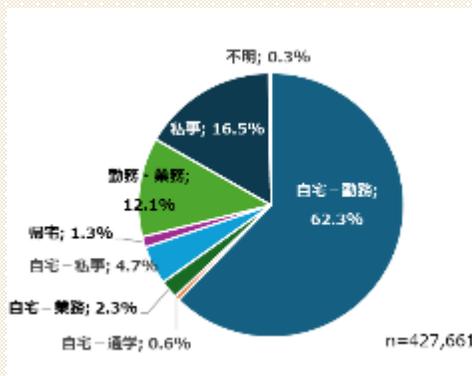
三崎橋～一ツ橋

- ◆ **会社員**：通勤目的が約5割
- ◆ **学生**：他と比べて通学目的が多い



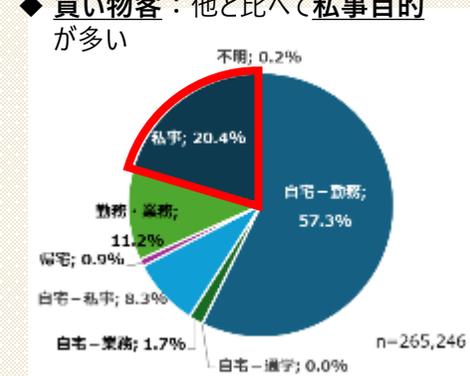
一ツ橋～鎌倉橋

- ◆ **会社員**：通勤目的が約6割



鎌倉橋～江戸橋

- ◆ **会社員**：通勤目的が約6割
- ◆ **買い物客**：他と比べて私事目的が多い



江戸橋～豊海橋

- ◆ **会社員**：通勤目的が約5割
- ◆ **住民**：他と比べて、帰宅目的が多い

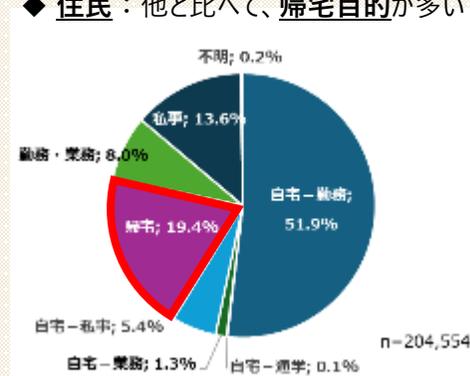


図 各ゾーンの来訪者の来訪目的割合（データ出典：平成30年パーソントリップ調査データ）

日本橋川の賑わい創出に向けた検討会

◆ 設置目的

日本橋川周辺の特性を活かした水辺空間の賑わい、水辺景観の向上、水質改善に関する検討を行うため、検討会を設置（令和6年5月）

◆ 委員等構成

学識委員 岸井隆幸（日本大学 名誉教授 【座長】）
知花武佳（政策研究大学院大学 教授 【副座長】）
廻洋子（敬愛大学 情報マネジメント学部 特任教授）
中島典之（東京大学 環境安全研究センター 教授）
田中里沙（事業構想大学院大学 学長）
米家志乃布（法政大学 文学部 教授）
横張真（東京大学 特任教授）

幹事

都市整備局長（代表幹事）
政策企画局計画調整部長
生活文化スポーツ局文化振興部長
都市整備局企画担当部長、景観・プロジェクト担当部長、まちづくり調整担当部長、都市基盤部長
環境局自然環境部長
産業労働局観光部長
建設局河川部長、企画担当部長
下水道局計画調整部長
千代田区環境まちづくり部長
中央区都市整備部長
首都高速道路㈱計画・環境担当部長、更新・建設局日本橋プロジェクト推進部長

2050東京戦略
～東京もっとよくなる～



本件は、「[2050東京戦略](#)」を推進する取組です。
戦略19 緑と水「魅力と潤いのある「水の都」東京」

事務局
東京都都市整備局
都市づくり政策部広域調整課
総務部企画技術課



<基本方針で使用されている色について>

	薄浅葱	うすあさぎ	藍染めで染め出すことができる色の一種で、江戸時代に着物の色として流行した。
	紺青	こんじょう	飛鳥時代に中国から伝来した色で、江戸時代には浮世絵で多く使用された。
	菜種油	なたねあぶら	菜種油が灯油として普及した江戸時代から、袴の染色として流行した。
	珊瑚	さんご	赤い珊瑚を粉末にした顔料の色で、江戸時代にはかんざしなどに多く用いられた。
	江戸紫	えどむらさき	歌舞伎「助六由縁江戸桜」を契機に江戸を代表する染め色として流行した。
	素鼠	すねずみ	江戸時代に多くの鼠色が発明されたなか、混じりけのない本来の鼠色として命名された。
	萌葱	もえぎ	江戸時代に流行した色で、歌舞伎の定式幕にも用いられている。